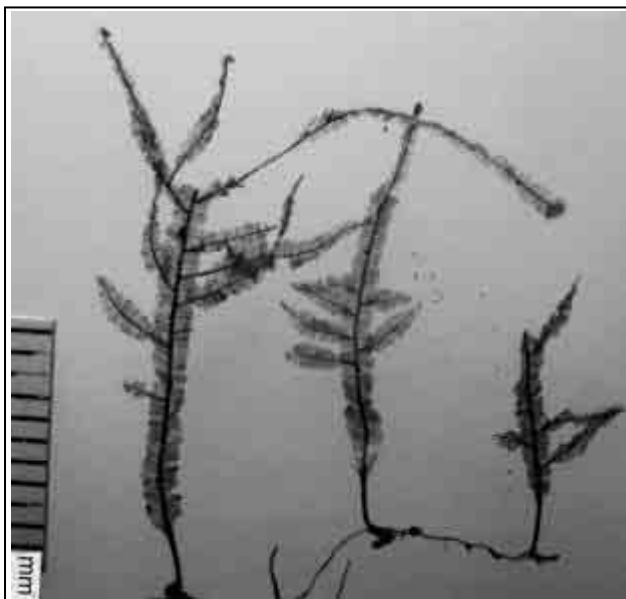


ヒメハゴロモゴケ *Homaliodendron exiguum* (Bosch et Sande Lac.) M.Fleisch.

【選定理由】

本種の属するキダチヒラゴケ属 (*Homaliodendron*) には、日本産として 3 種が記録されている。本種は其中でも最小の種で体長 2~4cm といった小形である。全国的にも稀産で、準絶滅危惧種に指定されている。県内既知産地も 5 ヶ所に過ぎず絶滅のおそれがある。



長篠村(現新城市), 水谷正美 No.1263.

【形態】

全形が小型な上に分枝も少なく、葉序は平面的、他種に紛れて目立たない。茎葉は舌形、葉の先は広く円頭で細胞の突起による小さな鋸歯になっている。日本ではまだ胞子体が見つかっていない。

【分布の概要】

【県内の分布】

現在 5 ヶ所、新城市(旧鳳来町)の鳳来寺山参道沿いの溪流辺、西三河の豊田市松平町、豊橋市の石巻山などで記録されている。

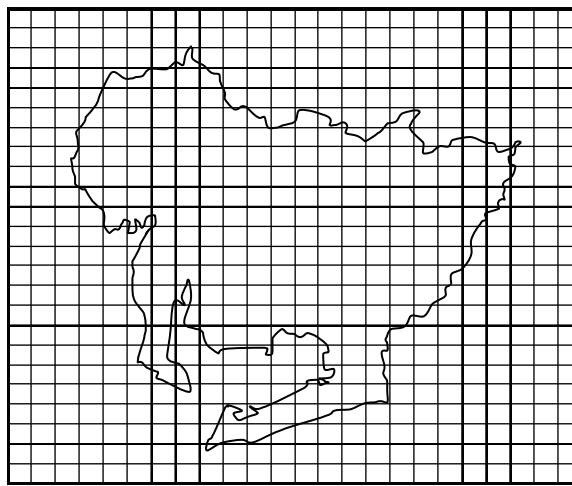
【国内の分布】

中部以南の本州から四国、九州、沖縄まで分布する。

【世界の分布】

台湾から熱帯各地、オーストラリア、アフリカに分布する。

県内分布図



【生育地の環境 / 生態的特性】

暖地の樹陰の湿った岩上、ときに樹皮にも着生する。同属のキダチヒラゴケが時に体長 10cm に達するのに対して、2-4cm 未満の小さい種で、まばらに生える。

【現在の生育状況 / 減少の要因】

鳳来寺山参道沿いの溪流辺の生育地はその後綿密な調査を行ったが、発見できなかった。小型な種であるため見逃した可能性や、溪流の上流あるいは下流へ生育地が移動している可能性があり、再調査が望まれる。石巻山のものは自然保護地域内にあるため健在と思われる。

【保全上の留意点】

小型な種で、周囲のわずかな環境の変化で容易に消滅するおそれがあり、周辺の環境維持が重要である。県内における新しい産地の発見が望まれる。

【特記事項】

暖帯林内の微細な環境下に稀産する本種が、県内で確認されていることは愛知県の蘚類フロラを特徴づけるものとして貴重である。

【関連文献】

高木典雄, 1965. その後みつかった分布上注意すべき鳳来寺山の蘚類. 鳳来寺山紀要, 8: 2-3. 鳳来寺山自然科学博物館.

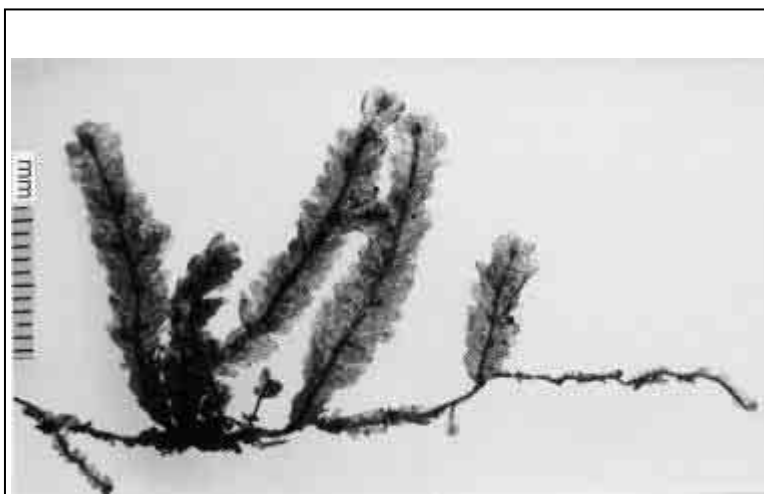
トサヒラゴケ *Neckeropsis obtusata* (Mont.) M.Fleisch.

【選定理由】

現在、県内では鳳来寺山の参道の途中（鳳来町門谷）の2ヶ所、及び乳岩峽の1ヶ所の岩面に生育しているのが知られている。鳳来寺山の産地では、発見当時は岩面を覆って生育していたが、現在はかろうじて残っている程度である。全国的にも稀産で、準絶滅危惧種に指定されている。

【形態】

同属のセイナンヒラゴケ（愛知県で絶滅危惧Ⅱ類に選定）に似るがそれより丈が低く、分枝も少なく、葉の配列もあまり扁平にならないことなどから、野外でも区別ができる。蒴柄が短いので蒴は苞葉内に沈生する。



鳳来寺山, 岩月善之助 No.1316.

【分布の概要】

【県内の分布】

鳳来寺山の参道途中（新城市（旧鳳来町）門谷）の2ヶ所及び乳岩峽の1ヶ所で記録されている稀産種である。

【国内の分布】

関東地方（房州清澄山）以南の本州から沖縄へ点々と産地が知られている。

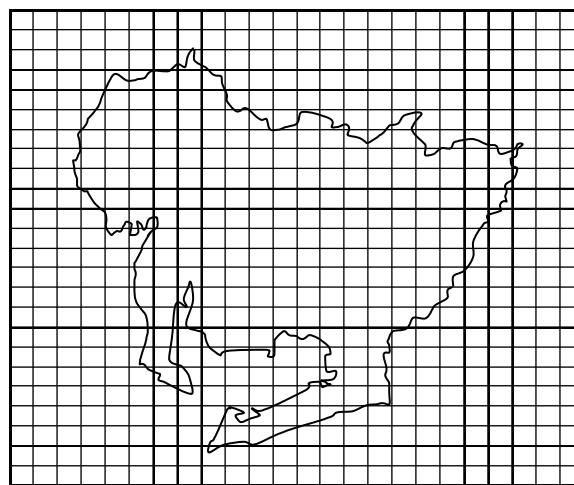
【世界の分布】

中国、台湾、インドシナに分布する。

【生育地の環境 / 生態的特性】

県内では暖帯林内の、やや乾いた岩面にへばりつくようにして生育している。南日本では樹幹に着生するが多いが、北上するにつれ樹林内の岩上に生育することが多くなる。鳳来寺山では岩上である。

県内分布図



【現在の生育状況 / 減少の要因】

鳳来寺山の生育地では、暖帯林（常緑広葉樹林）の林下に横たわる巨岩の側面に着生している。溪流辺からやや遠く、直射光の当たらないやや乾いた岩面である。生育地の鳳来寺山参道一帯は国指定の天然記念物となっており、人為的な改変などからは保護されているが、本種も含めて一帯の蘚苔相に衰退の傾向がみられる。林内環境の乾燥化が原因と考えられている。

【保全上の留意点】

鳳来寺山の生育地で個体数の衰退がみられるのは人為による原因とは考えにくく、林内環境の乾燥化によるものと考えられる。他の植物についても今後継続的な観察を行い、原因究明を行うことが必要である。

【特記事項】

全国的な稀産種であり、愛知県の蘚類フロラを特徴付けるものとして重要である。

【関連文献】

高木典雄, 1965. その後みつかった分布上注意すべき鳳来寺山の蘚類. 鳳来寺山紀要, 8: 1-6. 鳳来寺山自然科学博物館.

ホソオカムラゴケ *Okamuraea brachydictyon* (Cardot) Nog.

【選定理由】

豊田市の王滝溪谷の岩上の 1 地点が、本種の愛知県における確実な生育地である。本種は日本各地で記録があるが、近年それらの産地で再確認が難しくなっている。

【形態】

全形はアオギヌゴケ科の種に似る。葉は長さ 1－1.5mm で、葉先は短くとがり、葉身細胞は楕円状六角形、多少厚角。枝の先端に細い芽状の無性芽を付ける。雌雄異株。アオギヌゴケ科に分類されることがある。



豊田市王滝溪谷, 岩月善之助・鈴木直 No.20592.

【分布の概要】

【県内の分布】

県内に知られている確実な産地は豊田市王滝溪谷のみである。

【国内の分布】

本州、四国、九州に分布する。

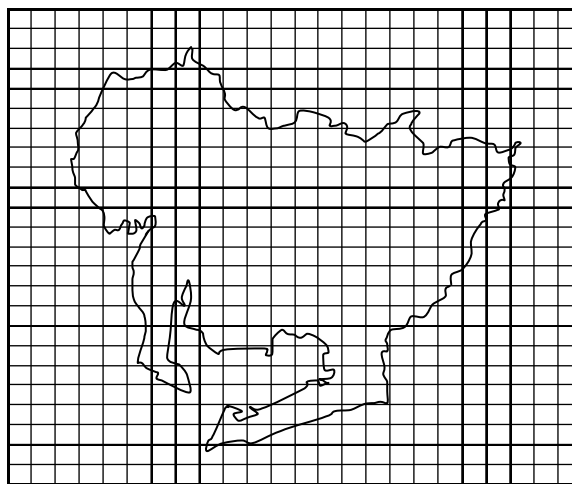
【世界の分布】

極東ロシア、朝鮮半島、中国に分布する。

【生育地の環境 / 生態的特性】

県内既知の産地は自然度の高い常緑広葉樹林内の樹幹である。

県内分布図



【現在の生育状況 / 減少の要因】

豊田市王滝溪谷では、調査で本種の生存が確認された。

【保全上の留意点】

今後、上記の地点で本種の生育状況の調査が必要である。

【関連文献】

Noguchi A., 1953. Musci Japonici III. The genus *Okamuraea*. J. Hattori Bot. Lab., 9: 1-15.

ホンシノブゴケ *Bryonoguchia molkenboeri* (Sande Lac.) Z.Iwats. et Inoue

【選定理由】

県内では 2 ヶ所、最高点の茶臼山の頂上近くにあった湿地及び山麓の尹良神社境内（国指定天然記念物ハナノキ自生地）の湿地で記録されたが、前者はレジャー施設建設のため消滅し、現在後者のみに生育する。愛知県としては寒地系の貴重な稀産種である。



植物体。北設楽郡豊根村茶臼山，高木典雄 撮影

【形態】

本種の全形はシノブゴケ属 (*Thuidium*) の種に似るが、長さ 20cm にも及ぶ長くて太い茎、規則正しく 2 回羽状に分枝し左右の枝はほぼ同長といった特徴があり肉眼でも判別できる。検鏡すれば茎や枝の上に、枝分かれした多数の毛葉があり、葉身細胞の背面中央に各 1 個、大形の牙状の乳頭があることなど、特徴のはっきりした種である。

【分布の概要】

【県内の分布】

北設楽郡豊根村の茶臼山頂上近くの湿地（現在この湿地は消滅している）、及び山麓の尹良神社境内（国指定天然記念物ハナノキ自生地）の湿地のみ。

【国内の分布】

北海道より九州に亘り高地の冷涼な湿地に広く分布する。

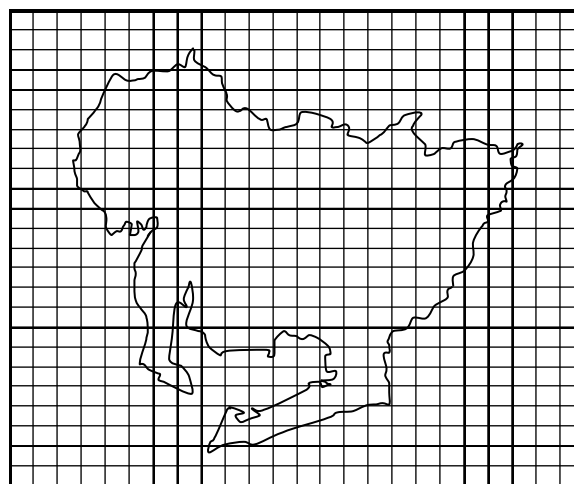
【世界の分布】

サハリン、シベリア、朝鮮半島、中国に分布する東アジア要素である。

【生育地の環境 / 生態的特性】

北海道から九州にかけて高冷地の林内の湿地に群生する。県内で記録された場所は、茶臼山の頂上近くの針葉樹に囲まれた林内の湿地、及び山麓のハナノキ群落の林床である。国内の他の場所では、湿った岩上に生育している例も知られている。

県内分布図



【現在の生育状況 / 減少の要因】

茶臼山の頂上附近の自生地は、一帯がレジャー施設等の建設によって大きく改変されているため、確認することができず、消滅した模様である。山麓の湿地にはかろうじて残っている。

【保全上の留意点】

茶臼山の頂上附近の自生地は、改変により消滅した模様であるが、山麓の湿地にはかろうじて残っている。ここは国指定天然記念物のハナノキ自生地であり、その庇護下において残存しているため、絶滅の危険はないものと思われる。一方で県内における新たな産地の発見が望まれる。

## マルバミヤベゴケ *Miyabea rotundifolia* Cardot

### 【選定理由】

県内では現在までに只 1 ヶ所の産地が知られている。民家近くのカキの老樹に着生していたもので、その後新しい産地が発見されないままに現在に至っている。小さな種で、全国的にも産地報告の少ない種であるため、絶滅危惧種 IB 類として見守っていく必要がある。

### 【形態】

本種はミヤベゴケ (*Miyabea fruticella* (Mitt.) Broth.) とよく似ているが、体がやや大きいこと、葉が全体まるみをもっていること (葉の中央部が基部幅が広いのに対して、ミヤベゴケでは基部近くで最も幅が広い) などがかろうじて区別できる程度で、研究者によっては一種の生態型 (乾燥地型) と考える人もある。

### 【分布の概要】

#### 【県内の分布】

県内での唯一の産地は北設楽郡設楽町田峰の民家近くのカキの老樹である。

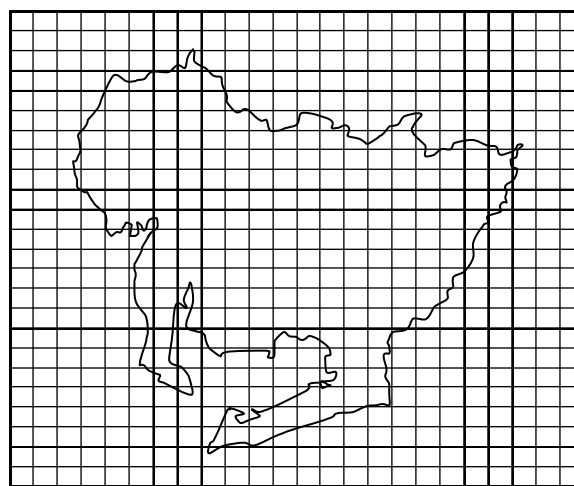
#### 【国内の分布】

本州、四国から知られている。

#### 【世界の分布】

シベリア、朝鮮半島に知られている東亜要素と考えられる。

県内分布図



### 【生育地の環境 / 生態的特性】

奥三河山間部の山畑にはカキ、クワ等の老樹がよく残っており、粗造な樹皮に適した特有の蘚苔類が着生している。本種もその一例であり、県内では山畑にあるカキの老樹の幹に着生していた。

### 【現在の生育状況 / 減少の要因】

本種が生育していたカキの老樹は現在消息不明である。

### 【保全上の留意点】

高冷地山間部の山畑に残存しているカキやクワの木は、利用価値のない老樹ということで急速に消滅し、同時にこれらに着生する蘚苔類も運命を共にしている。これらの樹木の保全が望ましいが、やむをえない場合はせめてもの処置として、着生している蘚苔類は事前に採取し保存することが望ましい。また、似たような環境下の老樹は、他にも例があるので新たな産地の発見が望まれる。

### 【特記事項】

山村のいわゆる山畑には、畦や土手にカキ、クワ等の老樹が残されており、その樹幹には乾燥に強い蘚苔類が多種類混生しながら生育し、特異な群落を形成している。湿りの多い林内の着生蘚苔類とは、種の構成が異なる特異な群落として、研究の余地が残されている。今まで蘚苔類研究者によっても見逃されてきた領域と考えられる。

### 【関連文献】

高木典雄, 1996. 蘚類植物. 設楽町誌自然資料編, pp.99-116. 設楽町.

## ハリミズゴケ *Sphagnum cuspidatum* Ehrh. ex Hoffm.

### 【選定理由】

本種は県内ではオオミズゴケと殆ど同じ分布域に生育し、園芸用として利用価値が高いオオミズゴケと同じ湿地で、棲み分けをしていることが多い。従ってオオミズゴケと一緒に乱獲される場合が多く、オオミズゴケと同じく保全に留意する必要がある。

### 【形態】

オオミズゴケとほぼ同じ大きさであるが、葉先が茎葉、枝葉共に細長く、先端も細長くとがるので、顕微鏡下で区別できる。枝の形も先端がより細く伸びるので、肉眼でも判別できる。ハリミズゴケの和名もこれらの特徴に基いている。

### 【分布の概要】

#### 【県内の分布】

旧南設楽郡から北設楽郡にかけての山地に多い。名古屋周辺にも出現するが、その場合はヌマスゲやヤマドリゼンマイ等の生育する、いわゆる遺存寒地植物の繁茂する湿地に多い。

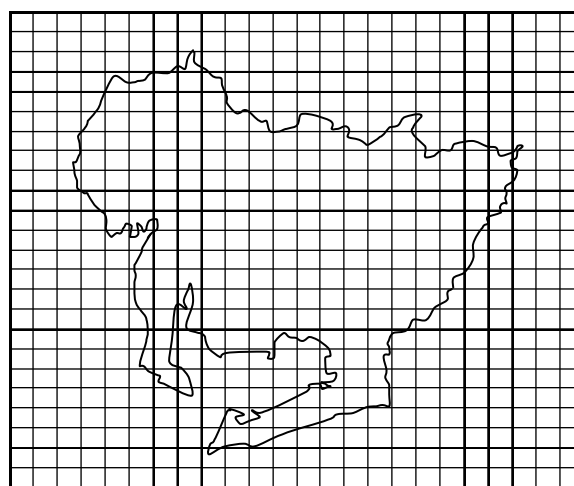
#### 【国内の分布】

本州以北、北海道にも分布するがオオミズゴケより北方に多い。

#### 【世界の分布】

北半球に広く分布する。

県内分布図



### 【生育地の環境 / 生態的特性】

上記のように、オオミズゴケと一緒に生育する機会が多いが、より寒地的色彩の強い維管束植物の生育する湿地に多い。

### 【現在の生育状況 / 減少の要因】

園芸業者や園芸愛好家による乱獲もあるが、それ以上に土地開発による湿地の消滅によって、急速にその生育地が失われつつある。

### 【保全上の留意点】

園芸用として利用価値が高いオオミズゴケと一緒に生育しており、乱獲されることが多い。オオミズゴケ以上に遺存寒地植物と共存する機会が多いため、本種の生育する湿地は、単にオオミズゴケのみの湿地より、その保全に留意する必要がある。

### 【特記事項】

オオミズゴケに比べ生育地が少ないため、湿地の性格を意義付ける価値は一層高いものと思われる。

### 【関連文献】

高木典雄, 1961. 作手湿原のミズゴケ類. 虫譜, 8 (1): 47-48. 三河生物同好会.

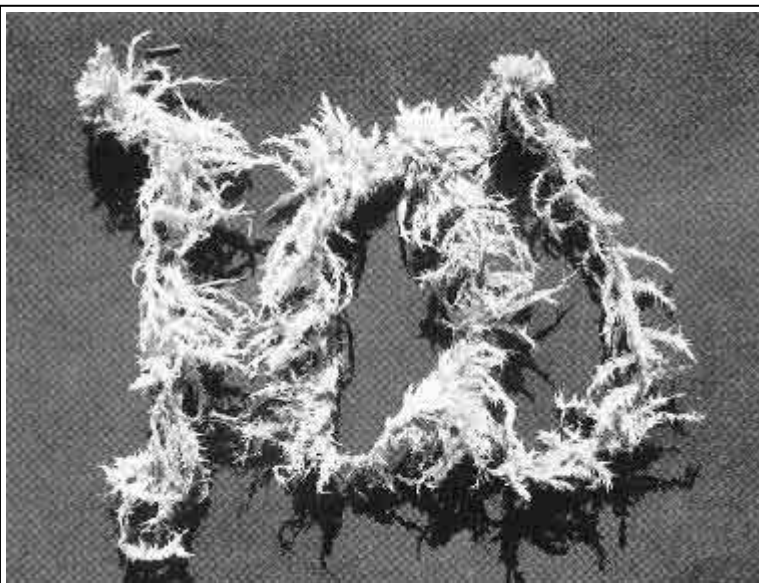
ホソベリミズゴケ *Sphagnum junghuhnianum* Dozy et Molke.

【選定理由】

ほとんどのミズゴケの仲間が、湿地内に群落を作って生育するのに対し、本種は主として常緑広葉樹林内の湿った岩崖面に生育する。愛知県では北設楽郡、旧南設楽郡の山間部に点々と分布する、変わった性格の稀産のミズゴケであり、保全に留意する必要がある。

【形態】

湿りのある濡れた岩崖面に下向きに垂れ下がりながら生育する。枝葉の透明細胞を顕微鏡で見ると腹面には細胞膜に沿って少数の大きい丸い孔が並ぶが、葉の上部の背面には多くの楕円形の孔が膜沿いに並ぶ。しかし葉の下部の透明細胞では背面に少数の丸い孔が中央に並ぶ。



植物体。新城市(旧鳳来町)乳岩峽, 2000年, 高木典雄 撮影。

【分布の概要】

【県内の分布】

北設楽郡(設楽町)、新城市(鳳来寺山、乳岩峽、亀淵川)、犬山市などに分布する。

【国内の分布】

本州から九州にかけて分布する。日本産ミズゴケの中では暖地系のミズゴケで、愛知県の産地は北限に近いものと思われる。

【世界の分布】

中国、台湾、ヒマラヤに分布する。

【生育地の環境 / 生態的特性】

他のミズゴケ類が湿地の構成種であるのに対し、上述したように主として暖帯林内の湿った岩崖面に付着するようにして群落を作る。

【現在の生育状況 / 減少の要因】

オオミズゴケの生育地と異なり、林内の岩崖にかろうじて生育しているため、一般に人目を引かないこともあり、生育状況は比較的良好である。

【保全上の留意点】

樹林内の半陰地に生育する種で、デリケートな林内環境に適応した種と考えられる。したがって樹林の伐採その他の環境変化で、容易に消滅すると考えられる。特に環境の変化には注意が必要である。

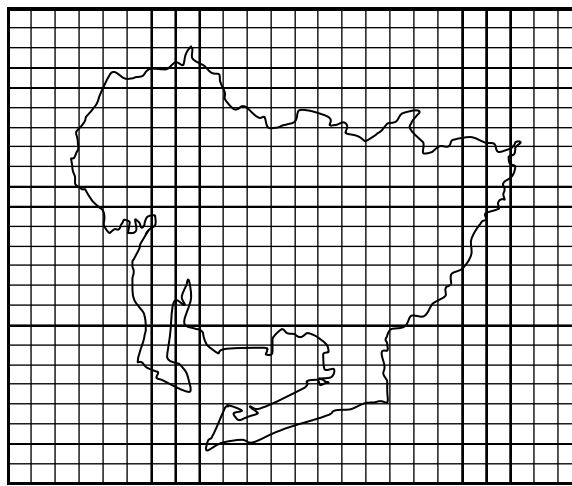
【特記事項】

ミズゴケ属の多くの種が、高緯度地域に多いのに対して、本種は珍しく暖地系のミズゴケで、愛知県の産地は分布地理学的に重要と考えられる。

【関連文献】

高木典雄, 1995. 愛知県における蘚苔類. 愛知県の植物相, pp.230-246. 愛知県農地林務部自然保護課.

県内分布図



クマノチョウジゴケ *Buxbaumia minakatae* S.Okam.

【選定理由】

本種は全国的には広く分布するものの、その出現率はきわめて低く、記録は稀であり、いわゆる珍品の名で呼ばれる。湿った樹林内の倒木の上などで発見されるが、そのような環境が少なくなっているため、今後発見される産地も含めて注意してゆく必要がある。

【形態】

同属のウチワチョウジゴケと同様、配属体はほとんど発達せず、孢子体のみが特異な発達をするため、一見して本属であると認識できる。ウチワチョウジゴケの蒴には稜があり、ウチワ状を呈するのに対し、クマノチョウジゴケの蒴には稜がなく、円筒形なので、両者は容易に区別ができる。

【分布の概要】

【県内の分布】

現在記録されている産地は6ヶ所（新城市（旧鳳来町）に3ヶ所、東栄町、岡崎市（旧額田町）、豊川市（旧一宮町）に各1ヶ所、いずれも三河に属する）であるが、生育基物が腐りかかった倒木などであり、以前記録された場所に今も残っている可能性は少ない。

【国内の分布】

北海道から本州にかけて分布する。

【世界の分布】

シベリア及び北米東部に分布する。

【生育地の環境 / 生態的特性】

生育地は湿度の高い深山の樹林の林床で、ある程度腐った倒木上などに生育する。他の蘚苔類と混生することはほとんどなく、各個体が単独で点在する。

【現在の生育状況 / 減少の要因】

県内で現在記録されている産地は、前述のように6ヶ所であるが、生育場所が腐りかかった倒木上ということもあり、以前記録された場所に今も残っている可能性は少ない。また、生育に適した湿りの多い深山樹林の環境が少なくなっている。

【保全上の留意点】

分布の範囲は広いが、出現率が極めて低く、綿密な調査で稀に発見されるいわゆる稀産種であり、生育に適した深山樹林の環境の保全が重要である。

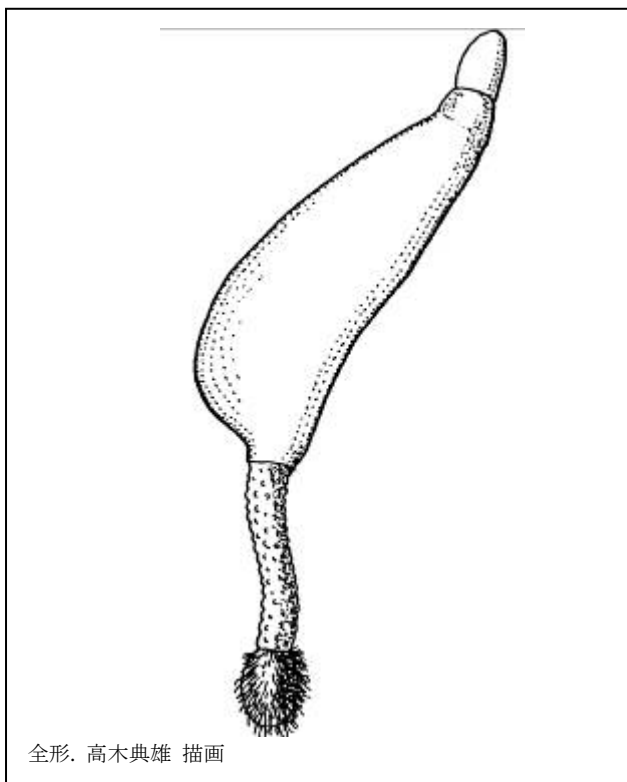
【特記事項】

分布域は広いが、産地は局所的に隔離している稀産種。生態的にも極めてデリケートな環境を選ぶ。その生育を支えている生理的条件、生態的条件の究明は今後の大きなテーマとなるであろう。

和名に「クマノ」の名がついているのは、本種の最初の発見地が熊野（和歌山県西牟婁郡近野村（現在の中辺路町））であることに基づく。

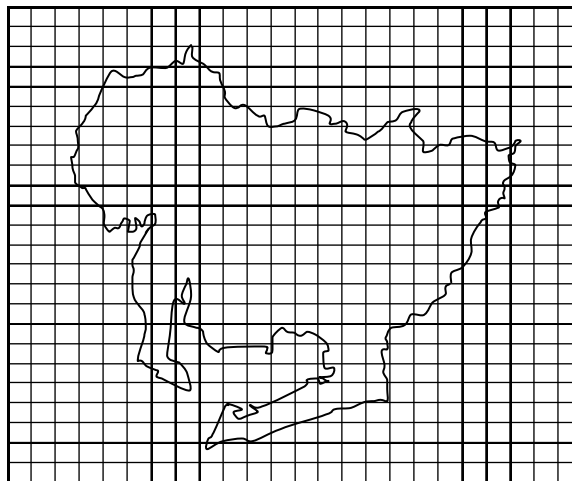
【関連文献】

高木典雄, 1988. 東三河産キセルゴケ類の蘚類. 鳳来寺山自然科学博物館報, 18: 19-26.



全形. 高木典雄 描画

県内分布図





クマノゴケ *Diphyscium lorifolium* (Cardot) Magonbo (Syn. *Theriotia lorifolia* Cardot)

【選定理由】

日本では関東地方以南、九州まで分布する暖地系の蘚。生育環境が山間の溪流沿いの陰地で、浅く水をかぶるような場所の岩上に限られている。稀産種。環境の変化に敏感で絶滅が危惧される。

【形態】

前述のように、狭い溪間の岩上に黒褐色の光沢のあるマットを作る。葉は幅広い基部から長く伸び、乾くと内側にゆるく巻く。葉身の大部分が太い中肋によって占められるので葉は平面というより棒状に近い。蒴はまれに着くが、葉群の中に沈生する。雌苞葉は通常葉より短く、通常葉の間にかくれる。

【分布の概要】

【県内の分布】

本種については、特に注意して調査が実施された経緯もあり、県内では主として三河地方の約 20ヶ所で記録されている。

【国内の分布】

関東地方を北限として九州まで分布する。

【世界の分布】

朝鮮半島、パキスタンなどに知られている。

【生育地の環境 / 生態的特性】

狭くうす暗い山間溪流内の固定した岩石の表面に、ひげが生えたように群生する。水流に流されぬように、岩面に密着している。

【現在の生育状況 / 減少の要因】

県内の産地は約 20ヶ所にわたっている。山間の溪流の微妙な環境下の生育種だけに、その中の数ヶ所については消滅している模様。

【保全上の留意点】

狭くうす暗い山間溪流内の岩面と、それに絶えず岩面を浅く潤す安定した水流が必要という、極めて限られた条件下に生育するもので、周辺環境の保持が厳しく要求される。

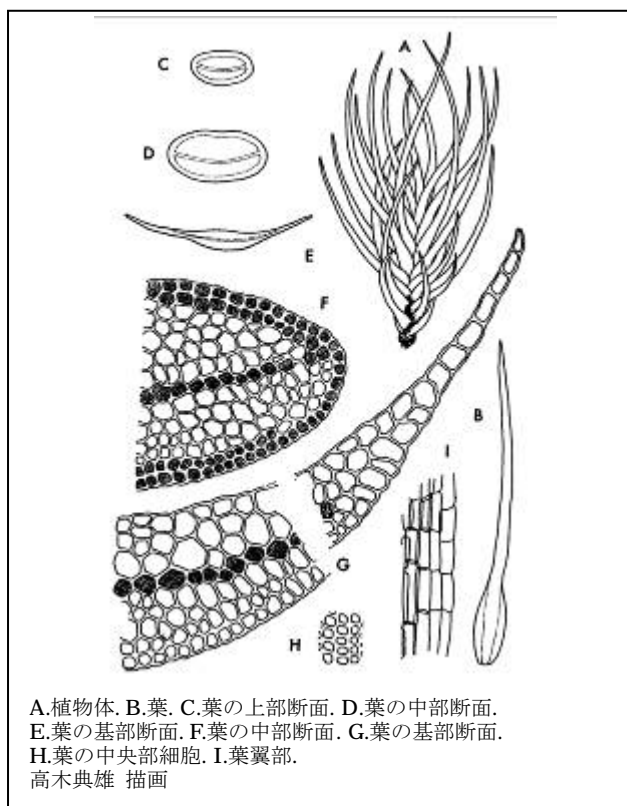
【特記事項】

形態的に極めて特異で、また特異な環境に生育する興味深い種である。

本属は日本では久しく 1 種のみであったが、近年カシミールクマノゴケ *Diphyscium kashimirensis* (H. Rob.) Magonbo が記録され、1 属 2 種となった。

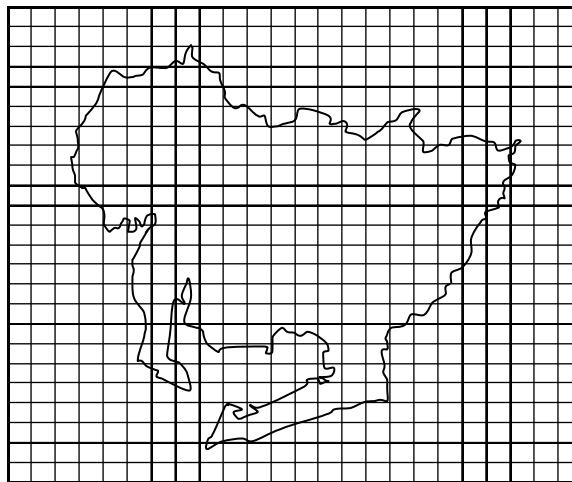
【関連文献】

高木典雄, 1996. 蘚類植物. 設楽町誌自然本文編, pp.346-368. 設楽町.



A.植物体. B.葉. C.葉の上部断面. D.葉の中部断面. E.葉の基部断面. F.葉の中部断面. G.葉の基部断面. H.葉の中央部細胞. I.葉翼部.  
高木典雄 描画

県内分布図



フウリンゴケ *Bartramiopsis lescurii* (James) Kindb.

【選定理由】

県内では只一ヶ所、段戸山（北設楽郡設楽町）で記録されている。日本中部の山岳地帯では亜高山帯の針葉樹林下に多い北方要素で、段戸山は本種の南への分布の一つの銚先と考えられ、自然分布の生き証人として重要と思われる。

【形態】

本種の特徴の一つは蒴が風鈴の形をしていることで、和名はこの形に基づいている。また茎の下半には葉がなくて細い糸状をなし、その下端に丸い塊になって假根が着く。この形状が人の毛髪を引き抜いたときの様子に似ているため一見して種の判定ができる。

【分布の概要】

【県内の分布】

唯一の産地は段戸山（北設楽郡設楽町）である。しかし、この他に天竜奥三河国定公園の中に新しい産地が期待される。

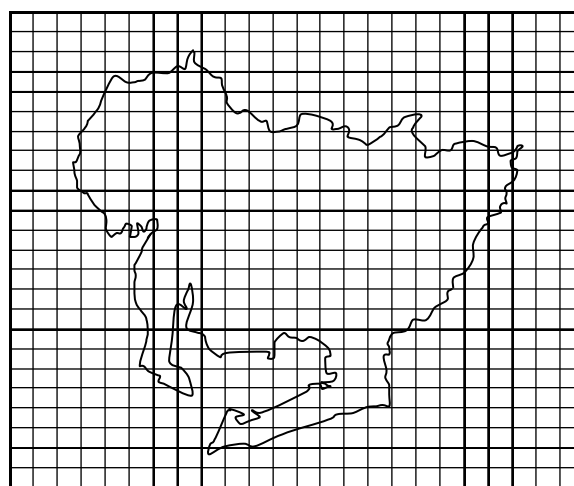
【国内の分布】

北海道から九州にかけて標高の高いところに生育する。九州では屋久島の頂上で記録されていて、日本における南限と考えられている。

【世界の分布】

アラスカからカムチャッカ、千島を経て日本列島へ分布する。ベーリング要素と呼ばれ、典型的な北方要素である。

県内分布図



【生育地の環境 / 生態的特性】

日本中部の山岳地帯では、亜高山帯の針葉樹林の林床に多く、段戸山では落葉樹林下の腐植の多い土手や岩の隙間に群落を作る。

【現在の生育状況 / 減少の要因】

現在、県内で知られている産地は北設楽郡段戸山のみであるが、最近の現地調査では、段戸山内の各所に見られ、樹林の伐採が行われない限り、絶滅のおそれはないように思われる。

【保全上の留意点】

被陰度の高い温帯林下に生育する種で、林内環境の変化に敏感な種と考えられるため、樹林全体の保護が必要である。

【特記事項】

本種は日本列島を北方より南下している寒地系の一種であり、本県内では奥三河に稀産し、愛知県の蘚類フロアの性格を示すものとして学術的に重要な種である。

【関連文献】

高木典雄, 1996. 蘚類植物. 設楽町誌自然本文編, pp.346-368. 設楽町.

## ヘリトリシッコゴケ

*Dicranodontium uncinatum* (Harv.) A. Jaeger (Syn. *D. fleischerianum* W. Schultze-Motel)

### 【選定理由】

本種の属するユミゴケ属 (*Dicranodontium*) には県内に 2 種が確認されており、そのうちの 1 種のユミゴケ (*D. denudatum*) は県内に多くの産地が知られている。ヘリトリシッコゴケについては段戸山裏谷に只 1 ヶ所産地が知られているのみであり、保全に配慮すべき種である。

### 【形態】

同属のユミゴケは茎から葉が落ちやすく、指先で撫でただけでも葉は脱落し、落ちた跡の茎の先端は裸の棒になって残る特徴があるが、本種の葉は脱落しない。葉を検鏡すると葉鞘部の内側に大きくて透明な細胞群が一つの区画を作っているので種の判別ができる。

### 【分布の概要】

#### 【県内の分布】

段戸山裏谷で一度記録されただけで稀産種と考えられる。

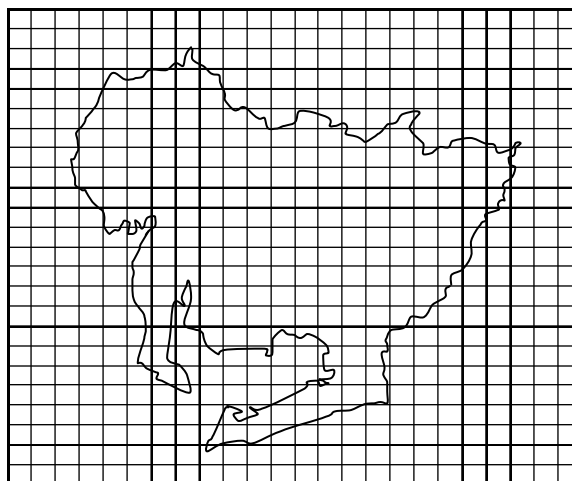
#### 【国内の分布】

本州、四国、九州の高地に分布するが発見されることの少ない種。

#### 【世界の分布】

台湾、フィリピン、ヒマラヤ、スリランカ、ジャバ、モルッカ、欧州と広く分布する。

県内分布図



### 【生育地の環境 / 生態的特性】

段戸山の生育地では、ブナ等の出現する温帯林の林床の、腐植質に覆われた岩面に生育していた。

### 【現在の生育状況 / 減少の要因】

現地での再確認はなされていないが、生育地の環境は以前と同じ状況であるため、再発見の可能性は残されている。

### 【保全上の留意点】

記録地では再確認がなされていない。同様な環境を有する場所を、もっと広い範囲で探索する必要がある。また、本種のような蘚類の生存は、維管束植物以上に生育地の環境によって左右されることが大きい。例えば一本の木を切り倒しただけでも、また一個の岩を動かしたただけでも、そこに着生する蘚苔類が全て消滅する可能性があることを考慮する必要がある。

### 【特記事項】

温帯林の林床に生育し、温帯林を特徴づける標徴的な意味が考えられ、温帯林との結びつきについて学術的に興味が持たれる。

### 【関連文献】

高木典雄, 1996. 蘚類植物. 設楽町誌自然資料編, pp.99-116. 設楽町.

ヤマトハクチョウゴケ *Campylostelium brachycarpum* (Nog.) Z.Iwats., Tateishi et Tad.Suzuki

【選定理由】

本種は全国レベルでも絶滅危惧Ⅱ類に指定されている稀産種である。蘚類研究者に注目され、最近になってその実体が明らかになり、学名の改正及び国内の分布も判明してきた。県内の産地も限られており、形態的にも特徴のある種であるため、全国レベルでの評価に準じて選定種とする。

【形態】

日本で記録されたハクチョウゴケ属 (*Campylostelium*) の種には、本種の他にハクチョウゴケ (*C.saxicola*) があるが、共に全長 2mm 程度の微小種。蒴柄が長くて、湿ると白鳥の首の様に強く湾曲する。微小な種なので発見には細心の注意が必要。

【分布の概要】

【県内・国内の分布】

本種は最初野口彰博士が新変種として、秋田市から報告した。次の産地として高木 (1967) は愛知県岡崎市 (旧額田町) から報告し、以後岡崎市茅原沢、同市桑原町、新城市 (旧南設楽郡鳳来町) 門谷でも記録した。

また、岩月ら (1999) によって全国的な産地が発表され、その中に豊田市王滝溪谷が含まれている。日本における分布の最高点は長野県八ヶ岳の 1,855m である。

【世界の分布】

北米東部 (テネシー州) にも知られる。

【生育地の環境 / 生態的特性】

県内の生育地は額田町、岡崎市茅原沢、桑原町のいずれも神社や寺院の境内にある風化した花崗岩上で確認された。豊田市王滝溪谷では狭い谷間の花崗岩面で確認された。

【現在の生育状況 / 減少の要因】

県内の産地は神社、仏閣の境内、または景勝地で環境的には保全された地域が多い。また、採集の対象となることもないため、いずれも記録当時のままで残っているものと思われる。

【保全上の留意点】

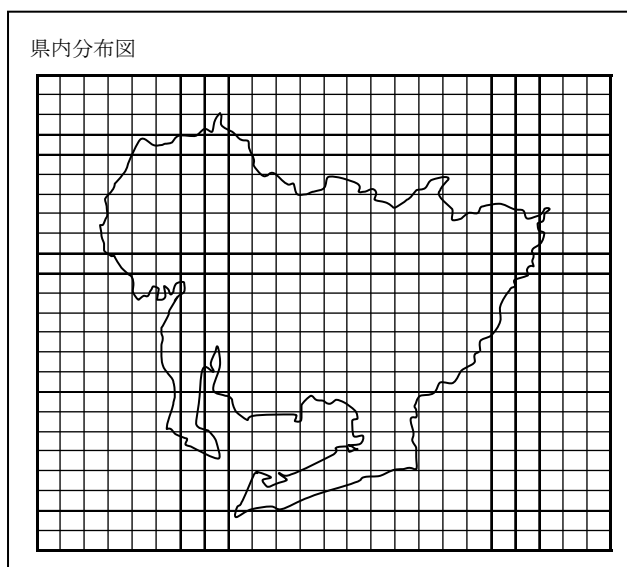
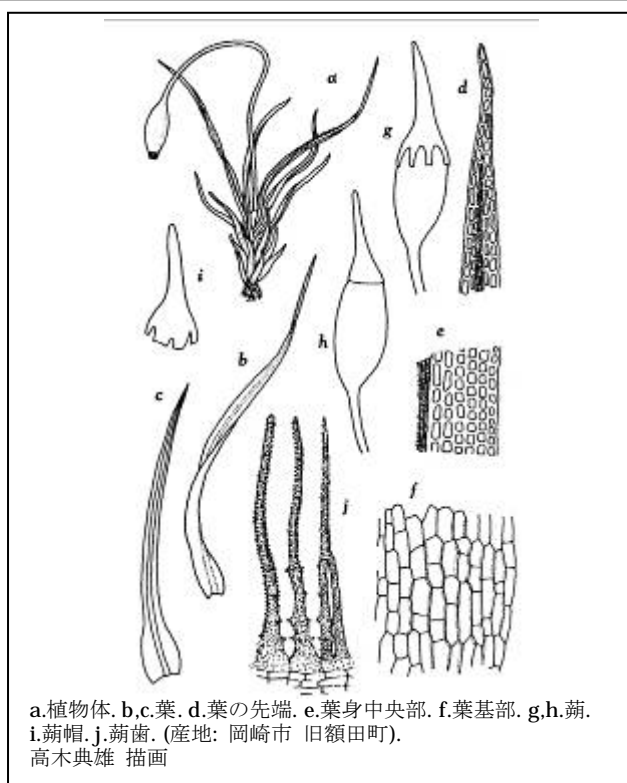
県内の産地は環境的には保全された地域が多く、生育地の環境に変化がないため、絶滅の心配はないと思われる。しかし、同様な環境を有する場所は多いため、新しい産地の発見が望まれる。

【特記事項】

本種はハクチョウゴケの変種として命名されたが、最近の研究で蒴菌の構造等に相異が認められ、独立した種となった。これらの遺伝子レベルでの相異の有無、程度について興味を持たれる。

【関連文献】

高木典雄, 1967. ヤマトハクチョウゴケ愛知県に産す. 植物研究集録, 11: 11-13.  
岩月善之助・立石幸敏・鈴木直, 1999. 日本産ハクチョウゴケ属. ヒコビア, 13: 79-85.



**シバゴケ(ホゴケ) *Racopilum cuspidigerum* (Schwägr.) Ångstr. (Syn. *R. aristatum* Mitt.)**

**【選定理由】**

本種は県内では主に豊川上流地域に分布するが産地は少ない。国内では中部地方から沖縄にかけて分布する暖地系の種で、本県の産地は種分布の北限線上にあると考えられる。愛知県の蘚類フロラの構成を解明する上で重要な種の一つである。



**【形態】**

日本では2種が記録されている。ホゴケの名は葉の中肋が葉の先端から長い芒になって伸出することに基づく。それと茎に着く葉に左右1列の大きな側葉と、それより小さい背部に着く1列の背葉をもつことも本属の特徴である。

亀淵沢, 高木典雄 No.7183.

**【分布の概要】**

**【県内の分布】**

新城市(旧鳳来町)の豊川上流(大島川)をはじめ、主に天竜川水系の上流に分布する。

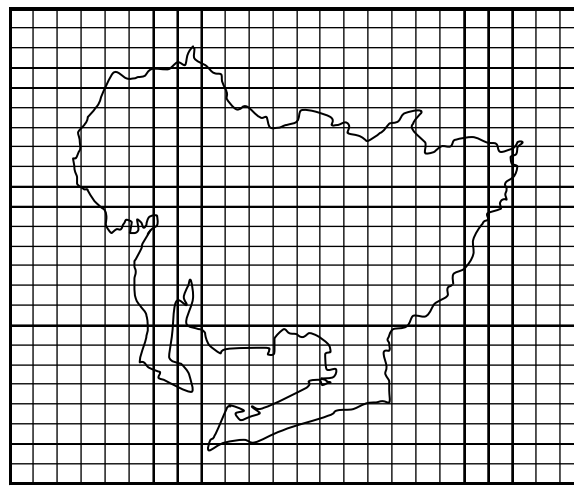
**【国内の分布】**

本州中部から四国、九州を経て沖縄、そして小笠原諸島へ分布する。

**【世界の分布】**

中国、台湾、フィリピンに分布する南方系の種である。

県内分布図



**【生育地の環境 / 生態的特性】**

溪流辺の湿った岩上や腐木上に着生し、平たいマットを作って生育する。

**【現在の生育状況 / 減少の要因】**

県内の産地のうち、新城市(旧鳳来町)の大島川のはものは、ダム建設のため消失した。天竜水系のものは消息不明である。一般的に産地の少ない種は環境の変化に弱い種と考えられ、その存続には細心の注意が必要である。

**【保全上の留意点】**

溪流辺の湿った半陰の岩上や腐木上に生育しているだけに、溪流周辺の樹木の伐採、溪流に沿った地域の土木工事などにより著しい影響を受けると考えられる。これらの行為に対する注意が必要である。また、県内における新しい産地の発見が望まれる。

**【特記事項】**

県内では豊川水系、天竜川水系のそれぞれ上流域で記録されている。本種は稀産種であると同時に、日本における分布の北限線上にあるものとして、これらの産地は重要である。

**【関連文献】**

高木典雄, 1996. 蘚類植物. 設楽町誌自然本文編, pp.346-368. 設楽町.

イトヒバゴケ(クワノイトヒバゴケ) *Cryphaea obovatocarpa* S.Okam.

【選定理由】

日本産の本属にはこの一種だけが知られている。全国レベルでも絶滅危惧Ⅰ類に選定されている稀産種である。県内では 8 ヶ所で記録されているが、発見の困難な種である。また、県内の既知産地は民家に近い畑地のクワやカキの木に限られており、絶滅のおそれがある。

【形態】

一次茎は着生樹の樹枝面に接着しているが二次茎は所々に直立し、不規則に分岐する。蒴柄は短く、蒴は苞葉の中に沈生し目立たない。蒴の着く頻度（着果率）は高く、採集された標本はすべてといていい位に蒴をつけている。

【分布の概要】

【県内の分布】

8 ヶ所の地点から標本が得られているが、その産地は北設楽郡と旧南設楽郡に限られている。

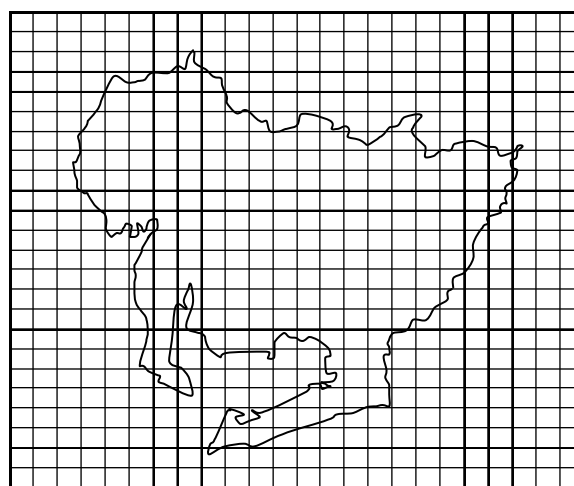
【国内の分布】

本州と四国から報告があるが、稀産種である。

【世界の分布】

日本の固有種と考えられる。

県内分布図



【生育地の環境 / 生態的特性】

樹皮着生の種で、特に山村の山畑に残されている風通しの良い場所のクワの樹皮に着生する機会が多い。

【現在の生育状況 / 減少の要因】

県内では北設楽郡から旧南設楽郡にかけて 8 ヶ所ほどで記録されている。しかし、クワの老樹自体が少なくなっていること、山村の集落近くでの環境が攪乱されることなどによって、個体数も減少の一途をたどっている。

【保全上の留意点】

樹幹着生の種は、その生育を支えている母樹そのものが消滅すると、着生種も消滅するため、母樹（主としてクワの老樹）そのものの保護が重要である。

【特記事項】

別名をクワノイトヒバゴケと呼ぶ場合もあり、クワを好む理由はクワの樹皮の粗造性と関係するものと思われる。

【関連文献】

高木典雄, 1996. 蘚類植物. 設楽町誌自然本文編, pp.346-368. 設楽町.

**カワブチゴケ** *Cytodontopsis leveillei* (Thér.) P.Rao et Enroth (Syn. *C. obtusifolia* (Nog.) Nog.)

**【選定理由】**

日本では静岡県以南の主として太平洋側の水系に分布し、川岸の灌木にのみ着生するという生態的に変わった性質をもっている。既知の産地も少ないということなどから、環境指標の蘚として重要である。

**【形態】**

懸垂性の蘚で川岸の灌木に着生し、茎は不規則に分枝しながら、長く垂れ下がり、ときに20cmに達することもある。雌雄同株で蒴は茎の途中の短枝の上に多数着く。蒴柄は短く、雌苞葉の中に半ばかくれる。孢子には表面に多くの乳頭がみられる。孢子又はちぎれた茎の断片が水流に流されて分布するものと考えられる。

**【分布の概要】**

**【県内の分布】**

新城市(旧鳳来町、旧新城市)などの豊川水系、設楽町に属する天竜川水系などに分布する。

**【国内の分布】**

静岡県以南、中国までの太平洋側の河川の上流域に分布する(一部、山口県の日本海側の水系からも記録されている)。また、調査不足のためと考えられるが、九州、沖縄からは未記録である。

**【世界の分布】**

ラオス、ボルネオ、ニューギニア等に知られている。

**【生育地の環境 / 生態的特性】**

カワブチゴケの名前の通り、川岸の灌木(ヤナギ類、サツキ等)の枝に限って生育する特異な生態を持つ蘚である。川岸での着生位置も水面からある高さまでで、それ以上にはみられない。おそらく増水期に上昇する水位の上限までと考えられている。

**【現在の生育状況 / 減少の要因】**

県内に知られていた産地のいくつかは、現地調査の結果、河川の改修、川岸に竹林などが広がること等の急激な環境変化により、減少の一途をたどっている。

**【保全上の留意点】**

生育地は川岸の斜面で、しかも流れが屈曲し、しぶきが上がるような場所に限られる。また、増水期には着生樹自体に水の衝撃が加えられるなど、微妙な条件が満たされている場所と思われ、そのような環境の維持に細心の注意が必要である。

**【特記事項】**

本種の着生位置(水面からの高さ)が増水期の水位の上限を示すと考えられ、一種の水位計の役目を果たすといった見方もなされている。また、最近河岸植生の研究が盛んになっており、維管束植物だけでなく、本種のような蘚類についても、興味ある研究が始まっている。

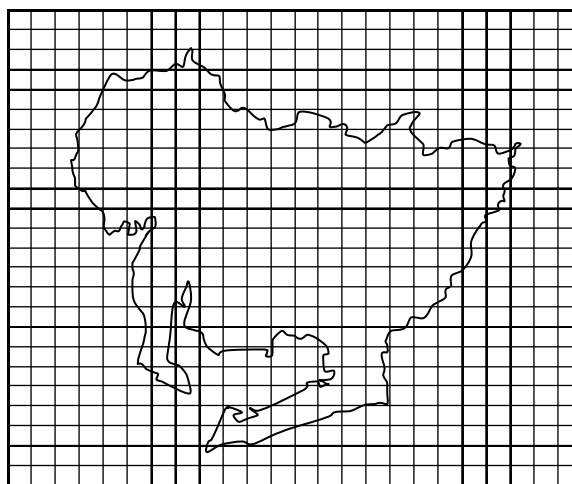
**【関連文献】**

高木典雄, 1986. カワブチゴケとその生態. 鳳来寺山自然科学博物館館報, 16: 27-31.



サツキの枝に着いた植物体。  
新城市(旧鳳来町), 高木典雄 撮影

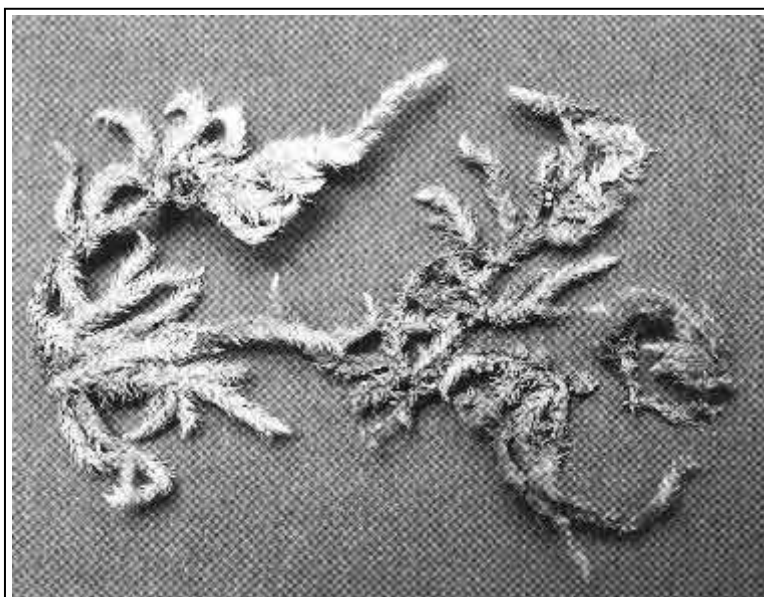
県内分布図



マツムラゴケ *Duthiella speciosissima* Broth. ex Card.

【選定理由】

愛知県内では北設楽郡、旧南設楽郡、旧東加茂郡にわたって、現在 10ヶ所程の産地が知られている。愛知県の場合はさし当って絶滅の心配はあまりないと考えられるが、県内での発見例も決して多くはない。



植物体。南設楽郡鳳来町, 2000年, 高木典雄 撮影

【形態】

茎が 15cm にも達する、大形で懸垂性の美しい蘚。湿りのある岩崖に懸垂して生育する。葉の基部は卵形、先端は長くて屈曲する鋭尖部に漸尖する。葉縁に鋸歯があり、中肋は長くて葉頂下に達する。葉細胞には表面に一個の乳頭があるなど、葉に多くの特徴をもっている。

【分布の概要】

【県内の分布】

北設楽郡、旧南設楽郡、旧東加茂郡にわたって、現在 10ヶ所程の記録がある。

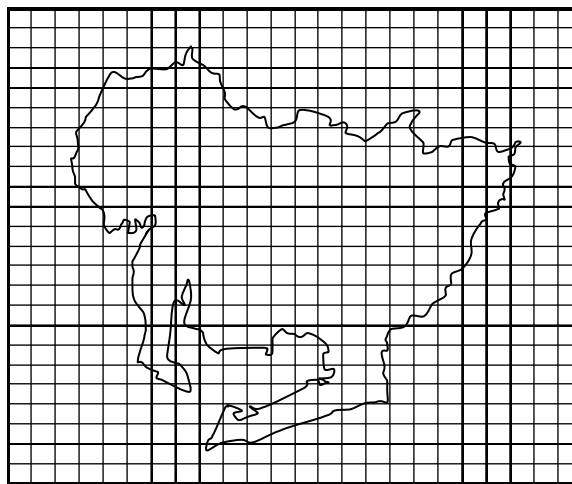
【国内の分布】

関東以南の本州、四国、九州に亘って分布する。

【世界の分布】

中国、台湾、にも知られている。東アジア系の大陸要素の一種と考えられ、地理的分布の上で興味ある種である。

県内分布図



【生育地の環境 / 生態的特性】

林内半陰のやや湿った岩面や岩隙に垂下する。石灰岩地に限ったことはないが、石灰岩地によく発見される。県内の約 10ヶ所の既知の産地はすべて天竜奥三河国定公園と愛知高原国定公園内にある。

【現在の生育状況 / 減少の要因】

県内の既知の産地では、ダム建設のために水没した数ヶ所の例を除けば、他は現在も良好な生育を示している模様である。

【保全上の留意点】

愛知県内では奥三河地域に点々と広範囲に分布している。また、県内の約 10ヶ所の既知の産地はすべて天竜奥三河国定公園と愛知高原国定公園内にあるため、当面絶滅の心配はないと思われる。

【特記事項】

中国、台湾にも分布をする植物地理学的に興味ある種で、相互間の形態的な相異の有無、生育環境の相異の有無、遺伝子レベルでの関連の有無など、学術的にとりあげて吟味する価値のある種と考えられる。

【関連文献】

高木典雄, 1996. 蘚類植物. 設楽町誌自然本文編, pp.346-368. 設楽町.



セイナンヒラゴケ *Neckeropsis calcicola* Nog.

【選定理由】

日本固有種で全国的にも産地が少なく、その多くが石灰岩地に生育する。愛知県の場合は石巻山を除けば必ずしも石灰岩地とは限らないが、県内の既知産地は極めて少ない。

【形態】

懸垂性の大形の蘚で、茎長 20cm を越すものもある。葉は 4 列に扁平につき、著しい横しわがある。中肋は細くて短く、葉縁は基部で片側が内曲する。蒴は極めて稀で、雌苞葉の内側に透明な糸状の側糸が密生する。

【分布の概要】

【県内の分布】

北設楽郡豊根村の天竜川水系、新城市（旧南設楽郡鳳来町）の大島川流域、豊橋市石巻山に知られている。主として石灰岩地に多い種であるが、県内では石巻山を除いて他の産地では必ずしも石灰岩地とは限らない。

【国内の分布】

本州、四国、九州の主として石灰岩地に多い種である。

【世界の分布】

日本固有種である。



石巻山, 岩月善之助 No.158.

【生育地の環境 / 生態的特性】

主として石灰岩、もしくは石灰分の多い岩石と判断される岩場の岩壁に懸垂しながら生育し、しばしば岩面を覆って大きな群落をつくる。

【現在の生育状況 / 減少の要因】

石巻山は県内における本種の代表的産地で、頂上一帯の石灰岩壁によく生育している。この一帯は維管束植物についても好石灰岩性の群落で覆われ、石巻山多米県立自然公園の指定地域と同時に、石巻山石灰岩地帯植物群落として国指定の天然記念物ともなっている。

他の 2 ヶ所の産地は森林内の半陰の岩崖（石灰分の多い岩かと想像される）に懸垂しているが量は少ない。また、新城市（旧鳳来町）の大島川の谷ではダム建設により消滅したため、現在では残り 1 ヶ所となっている。

【保全上の留意点】

石巻山では頂上一帯の石灰岩地域は国指定の天然記念物として保護されているので、絶滅の危険は少ないものと思われる。

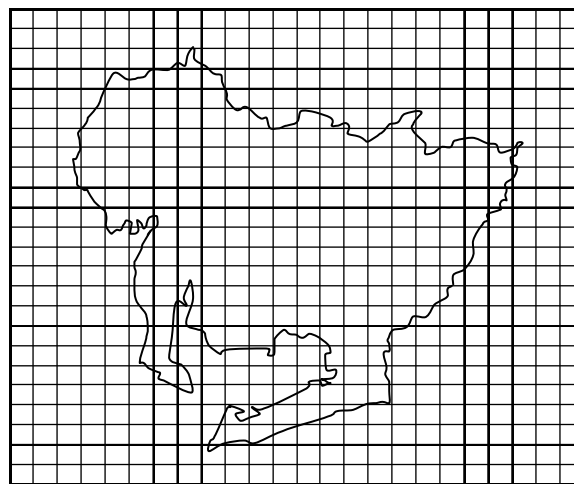
【特記事項】

日本固有種で、主として石灰岩地に分布する。多くの維管束植物と共に好石灰岩性群落を構成する。

【関連文献】

高木典雄, 1955. 石巻山の蘚類. 虫譜, 5 (2): 13-16. 三河生物同好会.

県内分布図



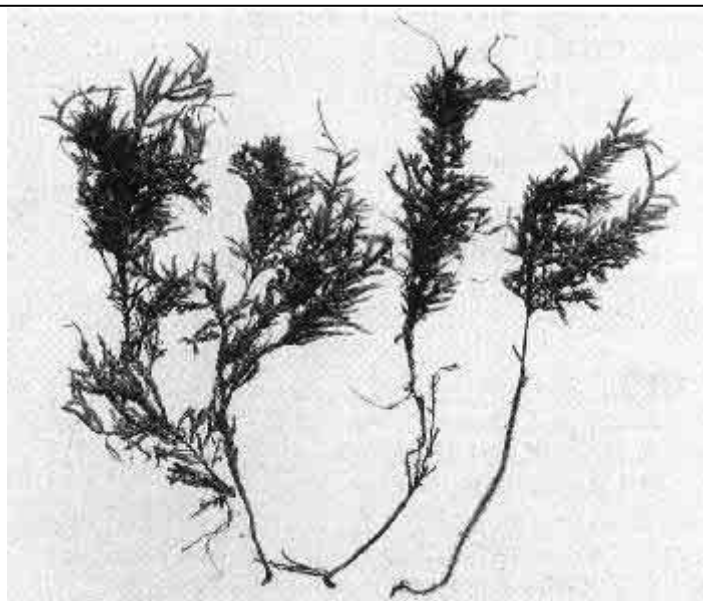
キブリハネゴケ *Pinnatella makinoi* (Broth.) Broth.

【選定理由】

国内では石灰岩地に稀産する代表的な好石灰岩性蘚類である。県内では4ヶ所で記録されているがいずれも石灰岩地域である。石灰岩地には鍾乳洞等があり観光地になる場合が多く(県内産地のうち2ヶ所はこの例に該当する)、人為的影響も大きいいため保全の必要がある。

【形態】

一次茎は岩面を横に匍うが二次茎は立ち上がり、密に分枝し、樹木状になる(キブリの名はこの形状に基づく)。枝先は緑色であるが他は褐色、光沢がなく硬い感じがする。葉は乾いても縮れない。葉の基部は下延する。中肋は強くて葉頂近くに達する。蒴は知られていない。



植物体. 新城市, 2000年. 高木典雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

豊橋市嵩山の蛇穴附近、新城市桜淵、豊橋市石巻山、北設楽郡東栄町の岩屋山の4ヶ所で、何れも石灰岩の露出した所である。これらのうち嵩山と岩屋山にはいずれも石灰洞がある。

【国内の分布】

本州中部以西から九州までの、いずれも石灰岩地に分布する。

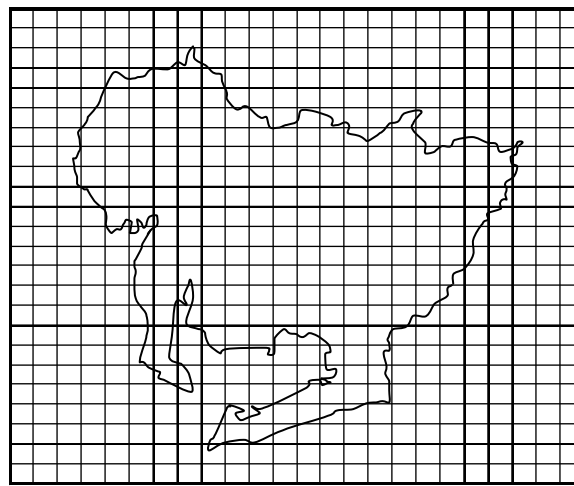
【世界の分布】

中国から台湾に分布する。

【生育地の環境 / 生態的特性】

典型的な好石灰岩性の蘚類で、林内のやや乾いた石灰岩の岩崖に群生する。日本ではすべて石灰岩地に限られているが、中国、台湾等では樹幹にも着生することが知られている。県内で記録された4ヶ所は、すべて石灰岩地であり、林内陰地の湿った石灰岩の岩壁に群生している。

県内分布図



【現在の生育状況 / 減少の要因】

再調査は現在新城市の桜淵のみで行われたが、本種の生育は良好であった。周辺は公園で人が多く集まる場所であるが、生育地は豊川に面する岩崖であり自然環境はよく保たれている。

【保全上の留意点】

生育場所はすべて石灰岩地の遮蔽された岩面で、人目につかず、今のところ絶滅の心配はないが、観光目的等で周辺環境の改変が行われると生存が危ぶまれる。

【特記事項】

石灰岩地域には特有の蘚苔類が生育し、それらの多くについて植物地理学的に興味深い研究が進められている。県内4ヶ所の本種の産地についても、共存する蘚苔類や維管束植物の比較、分布の要因など興味ある研究対象である。

【関連文献】

高木典雄, 1952. 桜淵付近の蘚苔類. 学淵(県立新城高校校友会誌), 20: 26-28.

イバラゴケ(ケムシゴケ) *Calypstrochaeta japonica* (Cardot et Thér.) Z.Iwats. et Nog.

【選定理由】

南方系の蘚で、愛知県は国内での分布の北限線上にあるものと判断される。絶滅危惧種として見守っていく必要がある。

【形態】

莖柄に単細胞の透明な刺が一面に生えているのでイバラゴケ、別名ケムシゴケと呼ばれる特徴のある種。同じ科の別属ツガゴケ属と外観は似ているが、イバラゴケは葉が暗緑色で乾いても縮れず、茎に疎につくことなどで区別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

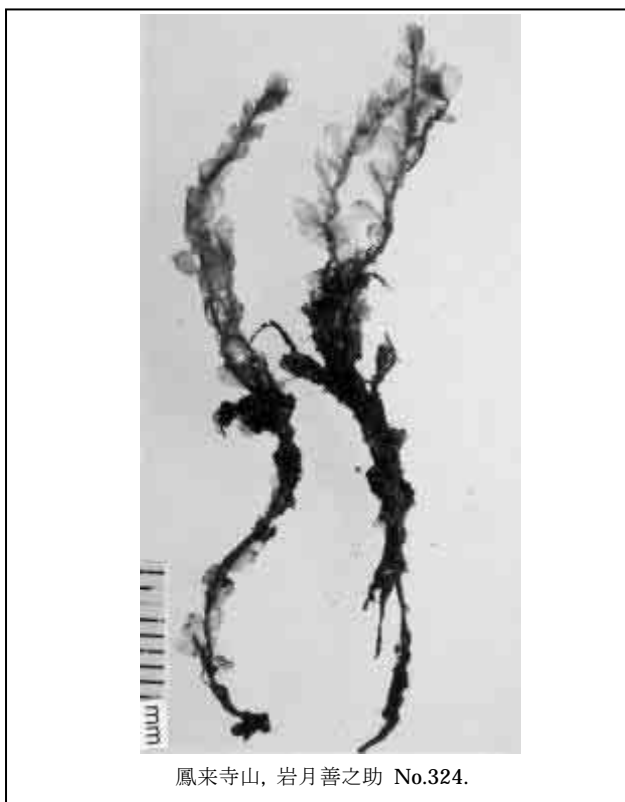
犬山市寂光院付近、新城市（旧南設楽郡鳳来町）の鳳来寺山参道や亀渕川の谷、その他豊川支流の谷などが知られている。

【国内の分布】

本州中部以南から沖縄まで、産地が知られている。

【世界の分布】

中国に知られている。暖地から亜熱帯にかけて分布する、南方系の蘚である。



鳳来寺山, 岩月善之助 No.324.

【生育地の環境 / 生態的特性】

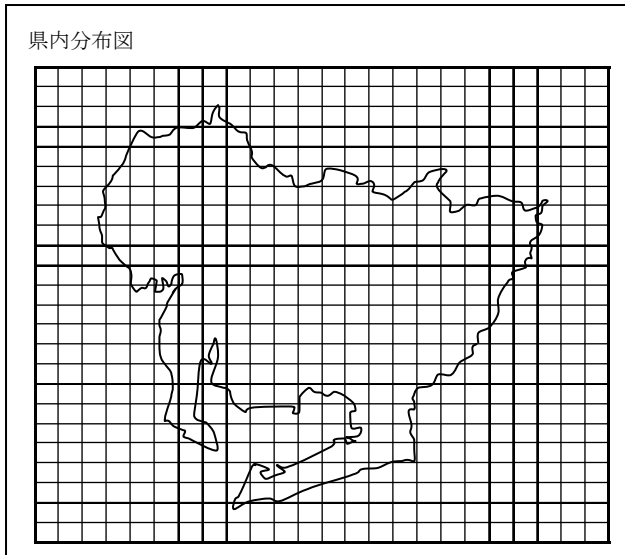
暖帯林下の陰地、湿った岩面に塊状の群落をつくる。群落の一塊を手にとって絞ると、水が滴る程の好湿性の種である。

【現在の生育状況 / 減少の要因】

県内の既知産地は現在のところ保全されている模様である。観賞用に採集される心配はないため、産地における伐採や諸工事さえなければ、ひっそりと生き続けるものと推定される。

【保全上の留意点】

種そのものが採取等によって生育地から消滅する心配は少ないが、水分の枯渇や汚濁により容易に枯死する運命にある。周辺の樹木の伐採や土木工事などに環境への十分な配慮が必要である。



県内分布図

【特記事項】

県内産の蘚類の中では南方系の稀産種であり、愛知県の蘚類フロラが、分布地理学的にいかなる要素により成り立っているかを示唆する資料として重要である。

【関連文献】

高木典雄, 1995. 愛知県における蘚苔類. 愛知県の植物相, pp.230-246. 愛知県農地林務部自然保護課.

ヤクシマツガゴケ *Distichophyllum collenchymatosum* Cardot

【選定理由】

県内では今までに新城市（旧鳳来町）の亀淵川の谷その他で記録されている。稀産種である。愛知県では蘚苔フロラの調査が現在未だ不十分な段階にあるため、今後新産地の追加が予想されるが、本種については依然として稀産種であろうと想像される。

【形態】

本種は同属の普産種ツガゴケ (*D. maibarae*) に似るが、大形で茎は黒褐色、葉も大きく、葉縁の筋が2列で幅広く、細胞も大きいので区別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

新城市（旧鳳来町）亀淵川その他、同市内では宇連川上流や乳岩、豊川市では宮路山から記録されているが稀産種である。

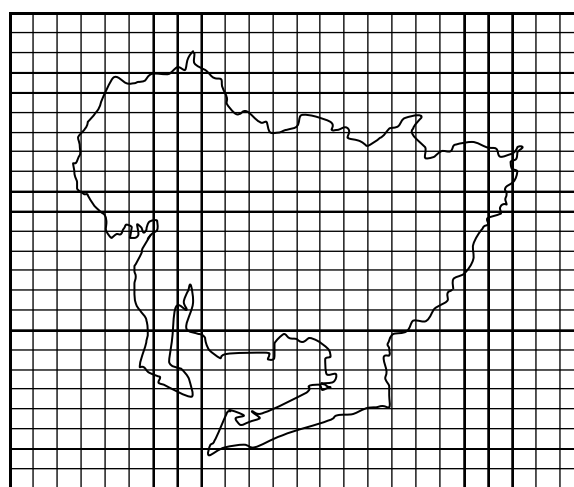
【国内の分布】

新潟県、群馬県以南の本州から沖縄にかけて分布する。

【世界の分布】

台湾、フィリピンにも知られている南方系の種である。

県内分布図



【生育地の環境 / 生態的特性】

イバラゴケ同様、暖帯林下の陰地、湿った岩面に塊状の群落をつくる。

【現在の生育状況 / 減少の要因】

稀産の種であるが、観賞用に採集される心配はないため、今のところ県内の既知産地では残存しているようである。

【保全上の留意点】

種そのものが採取等によって生育地から消滅する心配は少ないが、水分の枯渇や汚濁により容易に枯死する運命にあるので、周辺の樹木の伐採や土木工事などにあたっては、環境への十分な配慮が必要である。

【特記事項】

県内産の蘚類では南方系の稀産種であり、愛知県の蘚類フロラが分布地理学的に、いかなる要素により成り立っているかを示唆する資料として重要である。

【関連文献】

高木典雄・小笠原昇一, 1971. 愛知県の蘚苔類. 愛知の植物, pp.167-177. 愛知県高等学校生物教育研究会.

## コキジノオゴケ

*Cyathophorum hookerianum* (Griff.) Mitt. (Syn. *Cyathophorella hookeriana* (Griff.) M.Fleisch.)

### 【選定理由】

県内ではこれまでに約 15 ヶ所から記録されている。県内では稀産種とはいえないが、愛知県は本種の北限に近い産地と考えられる。愛知県では絶滅危惧Ⅱ類として見守っていく必要がある。

### 【形態】

和名は葉を着けた枝の先端が細長く尾状に伸びる様がキジの尾羽根に似るところからつけられた。枝の先端部には線状の多くの無性芽をつける。近畿地方以西に分布するキジノオゴケに比べて、ずっと小形なのでコキジノオゴケと呼ばれる。キジノオゴケは長さ 4～5cm に達するが、コキジノオゴケは 2cm 足らずの大きさである。

### 【分布の概要】

#### 【県内の分布】

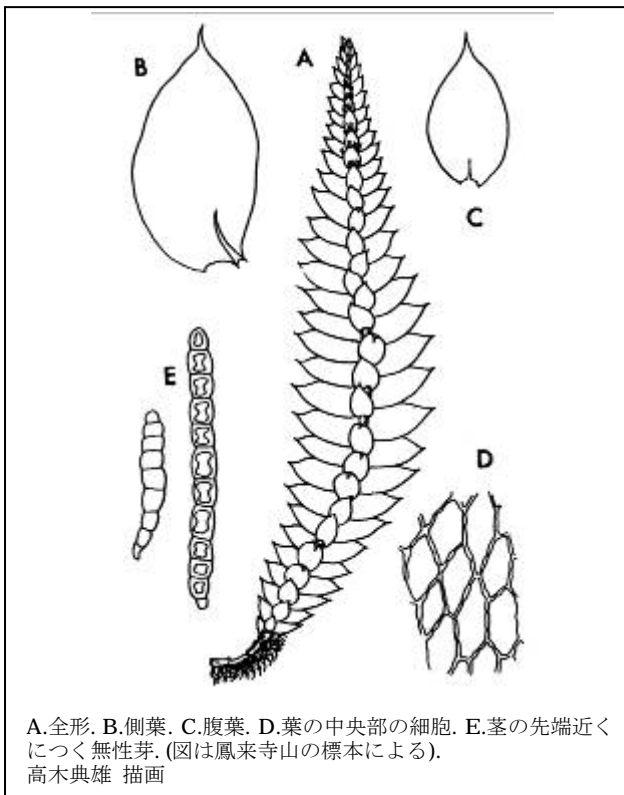
三河部、尾張部にわたり県内約 15 ヶ所で採集されている。

#### 【国内の分布】

本州中部以南、沖縄まで分布する。

#### 【世界の分布】

中国、台湾、フィリピン、シツキムに知られる南方系の種である。



### 【生育地の環境 / 生態的特性】

常緑広葉樹林内の湿りのある半陰の岩上に他の蘚苔類と混生しながら散生する。純群落を作らないことが多い。

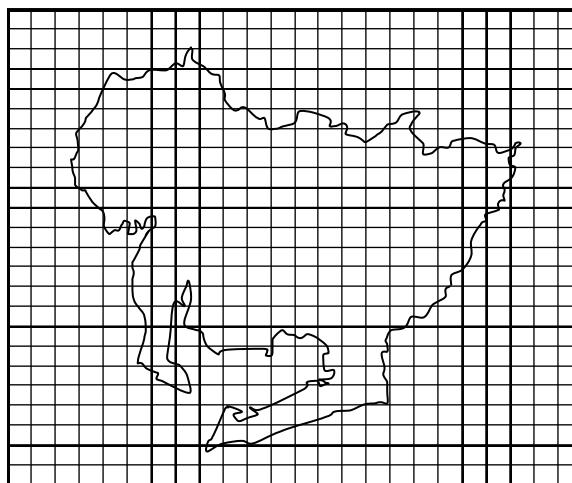
### 【現在の生育状況 / 減少の要因】

愛知県内では現在約 15 ヶ所の生育地が記録されているが、中でも多産地の鳳来寺山での観察では生育量の減少傾向がみられる。林内環境の乾燥化が原因ではないかと考えられる。

### 【保全上の留意点】

樹林内の半陰地で湿りのある岩面に生育する種であるため、林内環境の変化に左右されることが大きいと思われる。周辺の樹木の伐採や土木工事などにあたっては、環境への十分な配慮が必要である。

県内分布図



### 【特記事項】

本州中部以南、東南アジアまで分布する南方系の種で、愛知県は本種の分布の北限に近い産地と考えられる。愛知県の蘚苔類フロラの性格を論ずる際の資料として重要である。

### 【関連文献】

高木典雄, 1996. 蘚苔植物. 設楽町誌自然本文編, pp.346-368. 設楽町.

キンモウヤノネゴケ *Bryhnia trichomitria* Dixon et Thér.

【選定理由】

県内で知られている産地は奥三河高地の 3ヶ所で、稀産種である。今後新たな産地の発見が期待されるが、県内稀産の種であることには変わらないものと判断される。絶滅危惧Ⅱ類として見守っていく必要がある。

【形態】

ヤノネゴケ属 (*Bryhnia*) の 1 種であるが、キンモウ (金毛) の名が示すように孢子体の蒴帽に毛が密生するという特徴がある。また蒴柄の全面に乳頭があるのも、本種の特徴の一つである。

【分布の概要】

【県内の分布】

設楽町の岩古谷山と段戸山裏谷、豊田市(旧稲武町)の面ノ木峠東方の 3ヶ所から記録されている。

【国内の分布】

関東地方以南の本州、四国、九州に分布する。本州の日本海側にはほとんど見られず、大多数の産地は本州脊梁を少し南に越えた、冷涼な高地という面白い現象がある。

【世界の分布】

日本固有種である。

【生育地の環境 / 生態的特性】

高冷地の岩上や、木の根本などに柔らかいマットを作る。春になっても雪が残るような溪間に多い。県内では冷涼な奥三河の高地に稀に記録され、生育場所は春になっても残雪があるような、いわば吹き溜まりといった場所に発見されることが多い。

【現在の生育状況 / 減少の要因】

愛知県としては稀産の種であるが、開発の及ばないような山間部に生育しているため、当面の間絶滅のおそれはないと思われる。

【保全上の留意点】

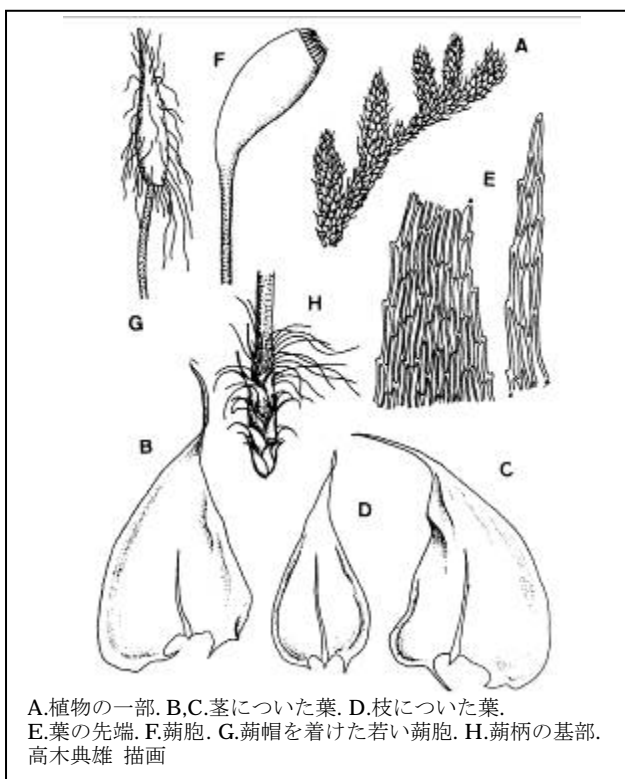
生育場所として似たような環境は他にもあるため、新しい産地の発見が望まれる。

【特記事項】

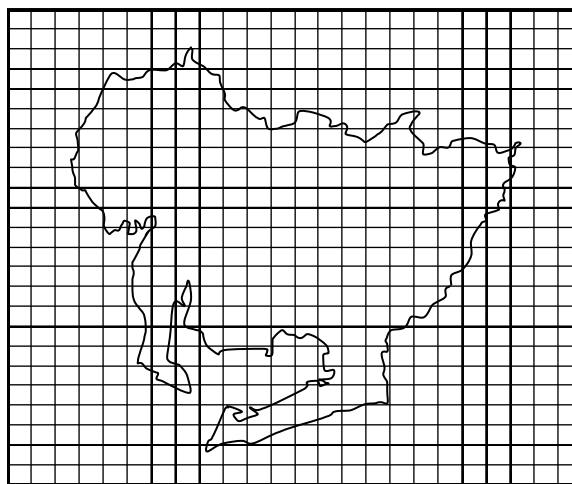
分類学的には興味深い種で、ヤノネゴケ属 (*Bryhnia*) の種の中で蒴帽に毛をもつという他にない特徴をもつ。このことからヤノネゴケ属から離して、独立した属を立てた方がよいという意見も発表されている。

【関連文献】

高木典雄, 1996. 蘚類植物. 設楽町誌自然本文編, pp.346-368. 設楽町.



県内分布図



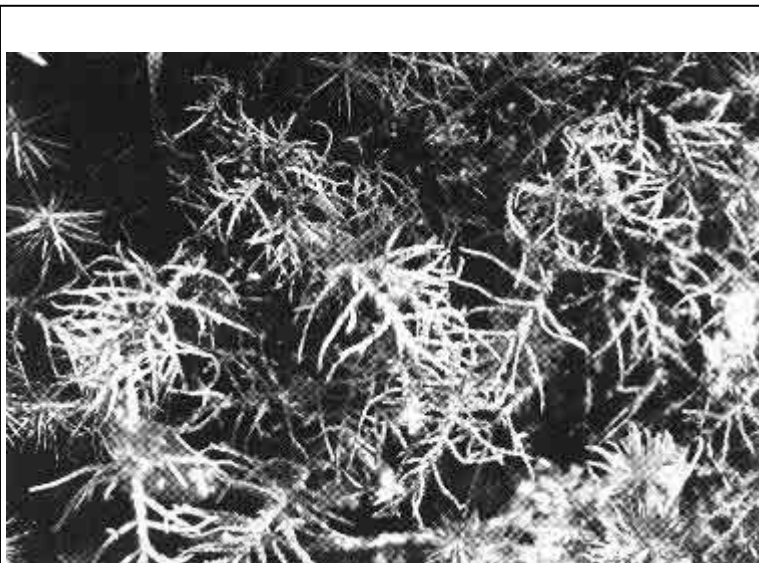
シノブヒバゴケ *Hylocomiastrum himalayanum* (Mitt.) Broth.

【選定理由】

天竜奥三河国定公園内の 2 ヶ所から記録されている県内稀産の種である。植物地理学的にも東亜ヒマラヤ要素の一種と考えられる。中部山岳地帯の高所に普産するが、南下の一つの鋒先が愛知県北部の高所に達しているものとして、産地を保全する必要がある。

【形態】

大形の蘚で、茎は斜上し、細長い枝が不規則に出て、樹形をなす。茎葉は三角形、葉面には深い縦じわがある。枝葉は広卵形、葉縁は全周に鋭い鋸歯があり茎葉と同じく葉面に深い縦じわがある。



植物体. 北設楽郡設楽町. 高木典雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

設楽町面ノ木峠西方、豊根村茶白山の標高 1,300m 付近の 2 ヶ所で記録されている。いずれも奥三河高原地帯である。

【国内の分布】

本州から九州までの寒冷な高地に分布する。

【世界の分布】

朝鮮半島、台湾、ヒマラヤに分布する。維管束植物で知られている東亜ヒマラヤ要素とその軌を一にしているものと思われる。

【生育地の環境 / 生態的特性】

高冷地林内の腐植質の多い湿った地上や岩上にゆるい群落を作る。

【現在の生育状況 / 減少の要因】

県内では奥三河の高冷地 2 ヶ所から記録されている。その後の現地確認はなされていないが、いずれも天竜奥三河国定公園に指定されている地域であり、開発行為等からは保護され現在も生育しているものと判断される。

【保全上の留意点】

日本中部の高冷地では普産の種であるが、県内ではその余波として、温帯林の地表にかろうじて生育しているものであり、生育地の樹林自体の保護が必要である。

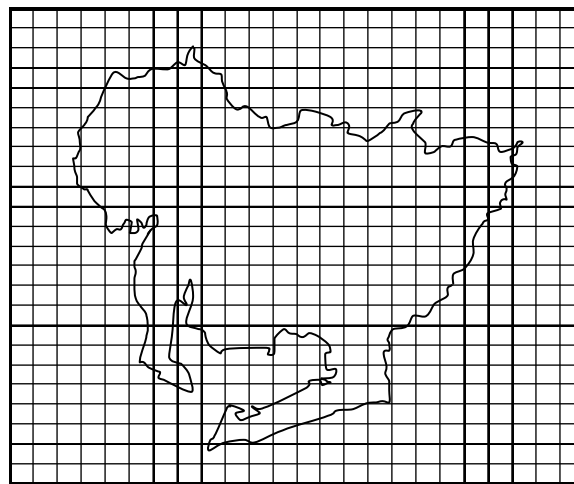
【特記事項】

本種は愛知県の蘚類フロラが分布地理学的にいかなる要素により成り立っているかを示唆する資料として重要である。学名にヒマラヤの名があるように、東アジアの高地要素で、愛知県の蘚類フロラ的一端が学名の上にも表れている。知られた産地は少ないが今後発見されるであろう新産地も含め、生育地の共通性について明らかにすれば、分布の機構解明に役立つものと思われる。

【関連文献】

高木典雄, 1982. 茶白山の蘚類植物. 鳳来寺山自然科学博物館館報, (11): 1-6.

県内分布図



## オオミズゴケ *Sphagnum palustre* L.

### 【選定理由】

本種がいわゆる普産種でありながら全国レベルで準絶滅危惧種に指定されているのは、稀産種であるとか、絶滅寸前にあるという理由ではなく、園芸用として利用価値が高いため、収奪の危険に曝されているためと考えられる。愛知県においても、その主旨に沿って準絶滅危惧種に選定する。

### 【形態】

日本産ミズゴケ属にはおよそ 40 種が知られているが、いずれも形態的に似ているものが多く、分類の難しいグループである。葉の細胞に透明細胞と葉緑細胞の 2 種があり、透明細胞は貯水細胞とも呼ばれ、多量の水を吸収し貯水する。園芸に使用するものは、この貯水性を利用するものである。オオミズゴケの透明細胞には数本の横線上の肥厚が見られる。

### 【分布の概要】

#### 【県内の分布】

もっとも広く分布するミズゴケであり、生育地を細かく調べた場合、百数ヶ所に及ぶと考えられる。

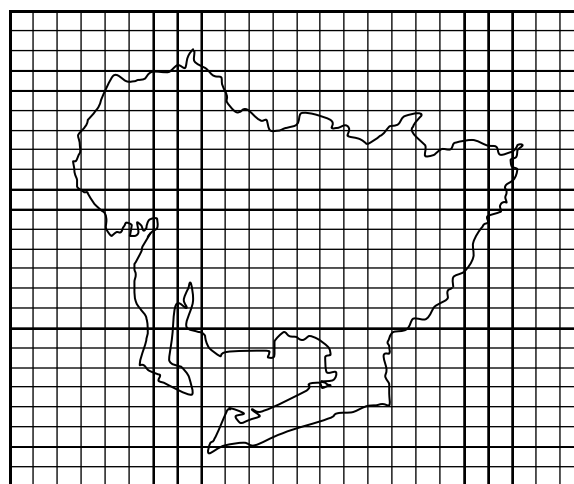
#### 【国内の分布】

日本全土に分布し、大小湿原、湿地の蘚苔類の主要な構成要素である。

#### 【世界の分布】

世界中に分布する普遍種である。

県内分布図



### 【生育地の環境 / 生態的特性】

湿地の最も普通な構成種。平地から高地の、冷涼な湧水の供給を受ける所に群落を作る。ただし、生活排水や汚水の流入する所には生育しない。また、野外における栽培も困難である。

### 【現在の生育状況 / 減少の要因】

園芸用として人によって乱獲される他に、土地開発、汚水の流入、水源の枯渇などで生育地は急速に失われつつある。県内の生育地は細かく調べたら百数ヶ所に及ぶと考えられる。実態調査では標本として保存されているものの中から、約 40 ヶ所の産地を挙げたが、現地に行ってみると、かなりの産地が既に消滅している。

### 【保全上の留意点】

普産種であるが、自然度の高い地域に限っての普産種であり、人工的に作った環境での育成も困難である。また、蘚類の中で最も利用価値の高い種であるだけに、オオミズゴケという種そのものの保護というより湿地そのものの保全に留意する必要がある。

### 【特記事項】

ミズゴケ類の生育する湿地は、他の湿地性動植物の自生地、棲息地でもあり、ミズゴケ類の保全は同時に湿地性動植物の保全と重なるものである。

### 【関連文献】

高木典雄, 1961. 作手湿原のミズゴケ類. 虫譜, 8 (1): 47-48. 三河生物同好会.



## イボミズゴケ *Sphagnum papillosum* Lindb.

### 【選定理由】

本種はハリミズゴケ同様、オオミズゴケと同じ湿地に共存することが多い上に、県内既知の産地が尾張部に多いため、人によって乱獲される可能性はより大きい。オオミズゴケ以上にその保全に留意する必要があると考えられる。

### 【形態】

オオミズゴケや、ハリミズゴケと同じ位の大型のミズゴケで外観はオオミズゴケとまぎらわしい。しかし、検鏡すると枝葉の透明細胞と葉緑細胞の間の細胞膜に多くの乳頭があるため区別は容易である。和名のイボミズゴケはこの乳頭に基づいている。

### 【分布の概要】

#### 【県内の分布】

既知の産地は三河部より尾張部に多い。

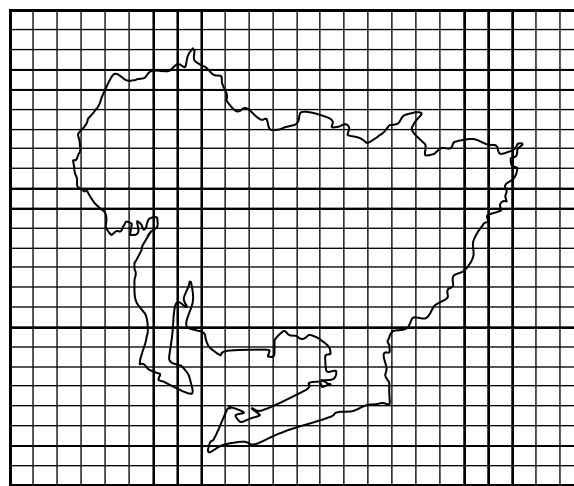
#### 【国内の分布】

北海道から九州にわたって広く分布する。

#### 【世界の分布】

北半球に広く分布し、ニュージーランドからも報告されている。

県内分布図



### 【生育地の環境 / 生態的特性】

生育地はオオミズゴケとよく似た環境。山地から平地にかけて県内に広く分布する。県内産ミズゴケ類の中では、オオミズゴケ、ハリミズゴケに次いで多くの産地が知られている。生態的特性については、オオミズゴケと全く同じとみてよい。

### 【現在の生育状況 / 減少の要因】

県内の既知産地はまだ各所にあるが、オオミズゴケと一緒に持ち去られることが多く、オオミズゴケ同様、その生育地は急速に失われている。

### 【保全上の留意点】

ミズゴケ類は湿地というデリケートな環境下に生育するもので、共存する維管束植物も含めて、更には湿地を成立させている周辺環境の保全が前提となる。

### 【特記事項】

ミズゴケ類の生育する湿地は、他の湿地性動植物の自生地、棲息地でもあり、ミズゴケ類の保全は同時に湿地性動植物の保全と重なるものである。

### 【関連文献】

高木典雄, 1961. 作手湿原のミズゴケ類. 虫譜, 8 (1): 47-48. 三河生物同好会.

コセイタカスギゴケ *Pogonatum contortum* (Brid.) Lesq.

【選定理由】

北海道から九州にかけて、標高の高い所に分布し、亜高山帯を本拠とする北方系の種である。県内では茶臼山、段戸山、津具村の白鳥山等で記録され、限られた産地が知られているのみである。愛知県の蘚類フロラの性格を示すものとして重要である。

【形態】

植物体は緑色から濃緑色を呈し、葉は乾くと著しく巻縮する。大形のスギゴケの一種で、茎は枝分かれせず1本立ち、株によっては長さ10cm以上に達することもある。葉を検鏡すると、葉鞘部上半の縁に鋸歯があるので、他の似た種から区別することができる。

【分布の概要】

【県内の分布】

茶臼山、段戸山、白鳥山に生育する。

【国内の分布】

北海道から九州（南限は屋久島の高所）に分布し、亜高山帯に多い。

【世界の分布】

北米西部から千島、朝鮮半島などアジア北部に分布する。ベーリング海峡を挟んで両大陸にまたがる、いわゆるベーリング要素の一種。

【生育地の環境 / 生態的特性】

亜高山帯の針葉樹林の林床を本拠とするが、県内ではブナの優占する温帯林の林床など、日陰の腐植土上に群生する。

【現在の生育状況 / 減少の要因】

県内では北設楽郡の数ヶ所で記録されている北方系の種で、林下に密生している状況からみて、林の伐採等がない限り、絶滅の心配はないものと思われる。

【保全上の留意点】

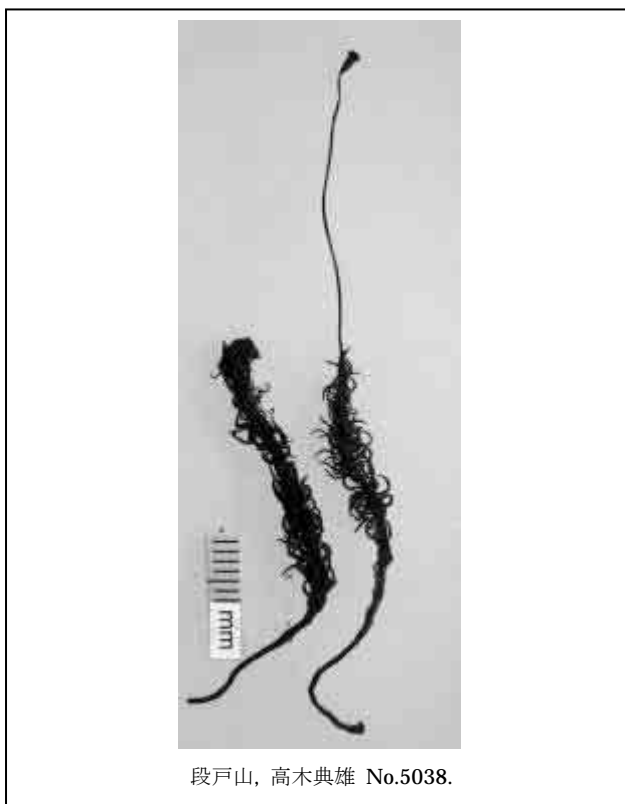
県内ではブナ等の優占する温帯林の林床など、被陰度の高い所に群生する。似たような環境でも、植林地にはほとんど見られない。このため、本種の保全には温帯極相林の保全が重要である。

【特記事項】

愛知県の蘚類フロラの性格を論ずる場合に、寒地系要素が含まれていることを証明する重要な資料となる種である。

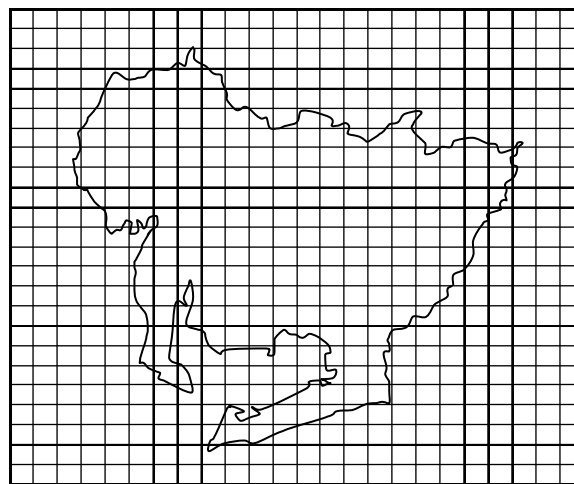
【関連文献】

高木典雄, 1996. 蘚類植物. 設楽町誌自然本文編, pp.346-368. 設楽町.



段戸山, 高木典雄 No.5038.

県内分布図



イワダレゴケ *Hylocomium splendens* (Hedw.) Bruch et Schimp.

【選定理由】

県内では茶白山、段戸山、白鳥山、面ノ木峠西方の4ヶ所の産地が知られている。これらは県内に稀産する寒地系蘚類の生育地として重要な地域である。本種の県内での記録は極めて少なく、その保全に留意する必要がある。



植物体。北設楽郡豊根村茶白山，高木典雄 撮影

【形態】

茎は横に匍い、規則正しく2～3回羽状にそして平らに分枝する美しい蘚である。茎は前年の茎の中間から出て斜上し、再び羽状に分枝、階段状の年次生長を行う。茎の表面は細く枝分かれをした多くの毛葉で掩われる。

【分布の概要】

【県内の分布】

茶白山、段戸山、白鳥山、面ノ木峠西方の4ヶ所で記録されている。これらはいずれも北設楽郡内の高冷地である。

【国内の分布】

北海道から九州までの高冷地に分布する。

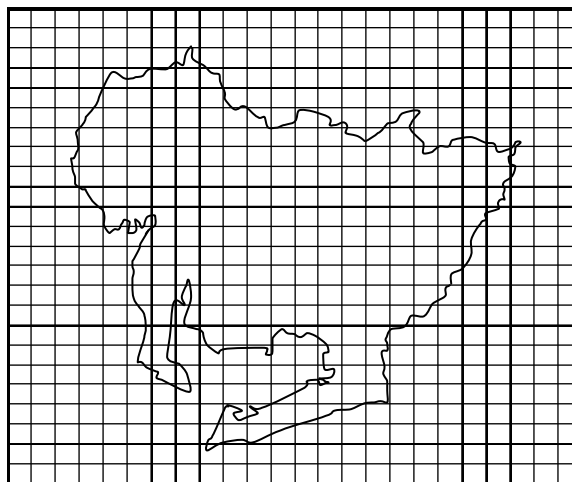
【世界の分布】

北極を中心に地球北部を全周して分布し、一部飛びはなれてニュージーランドにも知られている。

【生育地の環境 / 生態的特性】

亜高山帯の針葉樹林下の岩上や腐木上に、大きな群落を作っている。その分布の鋒先が県内北部にも延びているわけで、似た様な環境下に生育する。しかし産量は少ない。

県内分布図



【現在の生育状況 / 減少の要因】

県内における既知の産地は奥三河の4ヶ所であるが、国定公園指定地域もしくは自然環境保全地域になっているため、開発行為からは保護されており、生育状況は安定しているものと思われる。

【保全上の留意点】

蘚苔類の場合は微妙な環境条件下に、局所的な適応をして生育しているため、1本の木の伐採、1個の岩の移動、人の踏みつけ、小規模な工事等でも生育地を奪われることもあるため、よりきめ細かな配慮が必要と考えられる。

【特記事項】

本種は世界的には北極を取り巻く高緯度地域に分布する、いわゆる北周極要素の一員で、本種が愛知県にも生育していることは愛知県の蘚類フロラの構成を考える上で重要な指標となる。

【関連文献】

高木典雄, 1996. 蘚類植物. 設楽町誌自然本文編, pp.346-368. 設楽町.

## タチハイゴケ *Pleurozium schreberi* (Brid.) Mitt.

### 【選定理由】

県内では只 1ヶ所、北設楽郡設楽町（旧津具村）の白鳥山頂上（968m）から記録されている。本州中部の亜高山帯に多い種であるが、愛知県北部まで南下している一例といえる。茶臼山や段戸山でも発見が期待される。県内稀産の種であり、準絶滅危惧種として見守っていく必要がある。

### 【形態】

大形の蘚で茎は赤色を帯びる。茎は羽状に小枝を出しながら 8cm 近くにも立ち上がるのでタチハイゴケの名がある。葉は 2～2.5mm、覆瓦状に着く。翼細胞は丸みのある方形～長方形で褐色を呈し厚膜、翼部に明瞭な区画を作る。

### 【分布の概要】

#### 【県内の分布】

県内の唯一の産地は白鳥山（設楽町（旧津具村））である。白鳥山には本種と同じく愛知県の準絶滅危惧種であるオオミミゴケ、イワダレゴケも共存しており、興味深い山である。また、白鳥山は県により白鳥山自然環境保全地域に指定されている。

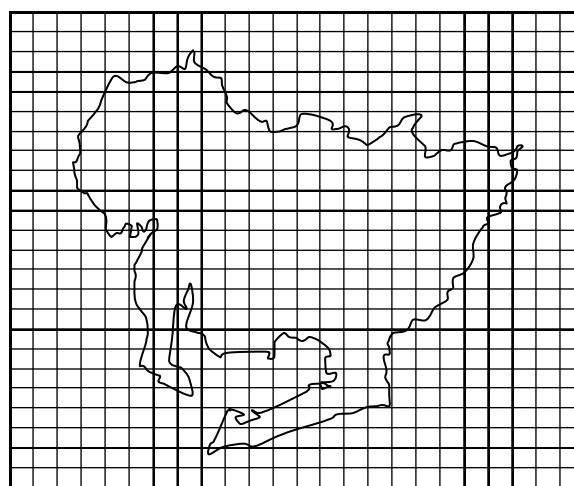
#### 【国内の分布】

北海道から九州まで分布する。亜高山帯針葉樹林の林床群落の主要な構成種である。

#### 【世界の分布】

北半球の北部に広く分布し、いわゆる北周極要素の一員である。

県内分布図



### 【生育地の環境 / 生態的特性】

本種の生育地は標高 968m のあまり高くない山の頂上であるが、山頂は岩崖が多く、北からの冷風を受ける場所であり、局所的ながら寒地系の蘚類の生育を許しているものと思われる。

### 【現在の生育状況 / 減少の要因】

白鳥山では県指定の自然環境保全地域として、山頂一帯が保護されているため、絶滅の心配はないと思われる。

### 【保全上の留意点】

白鳥山は愛知県指定の自然環境保全地域になっているため、不用意な開発はないものと思われる。しかし、蘚苔類の場合は微小環境下に生育しているので、人の踏みつけ、1個の岩の移動などでも、自然状態の攪乱につながる場合があり、よりきめ細かな配慮が必要と考えられる。

### 【特記事項】

白鳥山山頂附近は狭い場所であるが、県内でここだけに見出されている蘚類の 3 種（いずれも寒地系のタチハイゴケ、イワダレゴケ、オオミミゴケ）を温存している重要地点である。

### 【関連文献】

高木典雄, 1995. 愛知県における蘚苔類. 愛知県の植物相, pp.230～246. 愛知県農地林務部自然保護課.